

# 那珂 11

—二重環濠集落の調査—



福岡市埋蔵文化財調査報告書 第366集

福岡市教育委員会 1994

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第366集

# 那珂 11

—二重環濠集落の調査—



遺跡調査番号 9224  
遺跡略号 NAK37

1994

福岡市教育委員会

卷頭図版 1



1. 37次調査遠景(西から) (右上方には板付・金櫻遺跡がある)



2. 37次調査近景(北から)

卷頭図版2



1. A調査区 SB03 (上から)



2. A調査区SD02出土土器

## 序

九州の北岸に位置する福岡はその地理的条件から、古代より大陸や朝鮮半島からさまざまな文化を受容し栄えてきました。市内には数多くの遺跡が分布しています。その中でも那珂遺跡群は弥生時代から古墳時代を中心とした代表的な大規模遺跡です。

福岡市教育委員会ではさまざまな開発によって失われていく文化財について事前の調査をおこない、記録保存に努めています。

本書は倉庫、工場建設とともに埋蔵文化財の発掘調査報告書です。調査によって国内で最古段階の二重環濠構造が検出され、マスコミを通じて大きく報道されたことは記憶に新しいところです。濠内からは多数の遺物が出土し、これまで最古とされてきた板付遺跡の環濠より遡ることが明らかとなりました。こうした成果は、本地域の歴史や文化を語る上で、また弥生時代の開始に関わる重要な手がかりとなるものと考えられます。

福岡市ではこの遺構の重要性を踏まえて、地権者との協議をおこない、工事の見直しを了解頂き、遺跡の一部を市史跡として指定いたしました。また、これにともなって現地に遺跡説明板を設置するなどの整備も進めているところです。

また、発掘調査から報告書作成に至るまで、青柳喜平太代表取締役社長をはじめとする福岡大同青果株式会社の関係者、並びに関係機関、各位に多大なご協力、ご援助を頂きました。ここに心から感謝の意を表する次第です。

平成6年3月31

福岡市教育委員会

教育長 尾花 剛

## 例　　言

1. 本書は、福岡大同音楽株式会社による工場建設にともない、福岡市教育委員会が1992年7月20日～同年9月5日まで発掘調査を実施した那珂遺跡群第37次の調査報告書である。また、本書には1993年5月26日～同年5月31日、同年6月8日の市道博多駅五・川継拡幅（福岡市土木局事業）に関わる福岡大同音楽株式会社の擁壁工事の立合い調査や、この立合い調査と平行して実施した同社第6倉庫跡地における遺構確認調査の報告も含めた。
2. 本書使用の遺構実測図は、井英明、米村岳尚、吉田学、佐藤亞里、立石真二、吉留秀敏が作成し、著者は吉留秀敏がおこなった。
3. 本書使用の遺物実測図は井英明、森都順子、吉留秀敏が作成し、著者は吉留秀敏がおこなった。
4. 本書使用の写真は吉留秀敏が撮影した。なお、道路の航空写真は航空写真企画に依頼した。
5. 本書使用の標高は海拔高であり、方位は磁北である。本地域における真北との偏差は6°21'である。
6. 本書の執筆は第5章III-2)-3の一部を亀井明徳が、その他を吉留秀敏がおこなった。編集は吉留秀敏がおこなった。
7. 本書に関する図面、写真、遺物などの資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

## 本文目次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 調査の経過と保存策	1
第3章 調査組織	3
第4章 地理的歴史的環境	4
1) 那珂遺跡群の位置と立地条件	4
2) 那珂遺跡群の調査研究と成果	4
第5章 調査の記録	6
1) 調査方法	6
2) 地形と基本層位	7
3) 調査の概要	8

I、 試掘調査	8
II、 A (37次) 調査区	8
1) 調査概略	8
2) 検出遺構と遺物	9
III、 B (立合い) 調査区	26
1) 調査概略	26
2) 検出遺構と遺物	26
IV、 C (確認) 調査区	34
1) 調査概略	34
2) 検出遺構と遺物	34
第6章、まとめ	36
1) 古墳時代以降	36
2) 弥生時代中期～後期	36
3) 繩文時代晩期～弥生時代前期	37
1. 二重環濠造構について	37
2. 出土遺物について	38

### 挿図目次

図1、周辺道路分布図	4	図23、SD02出土石器、土器品	24
図2、那珂比恵道跡調査位置図	6	図24、擬立柱埴輪SB03天御國	25
図3、37次調査周辺地形図	7	図25、SB03出土遺物	26
図4、旧地形図(1940年代)	8	図26、土塙SK04実測図	26
図5、旧地形図(1920年代)	8	図27、その他の出土遺物	26
図6、試掘調査地点配置図	9	図28、B調査区平面図	27
図7、37次調査地点配置図	10	図29、拂SD01、SD03土層断面図	28
図8、A調査区平面図	11	図30、拂SD02、SD05土層断面図	29
図9、拂SD01土層断面図	12	図31、SD01、SD02出土遺物	30
図10、SD01上部出土遺物	12	図32、SD01周辺出土石器	30
図11、SD01上部出土遺物(1)	13	図33、SD03出土遺物(1)	31
図12、SD01上部出土遺物(2)	14	図34、SD03出土遺物(2)	32
図13、SD01上部出土遺物(3)	15	図35、SD05出土遺物	33
図14、SD01上部出土遺物(4)	16	図36、整穴住居SC08、上塙SK09出土遺物	34
図15、SD01中～下部出土遺物	17	図37、柱列SA07実測図	34
図16、SD01出土石器	18	図38、C調査区平面図	35
図17、拂SD02土層断面図	18	図39、SD21、柱穴SP23出土遺物	35
図18、SD02出土遺物(1)	19	図40、標準立地復元図	37
図19、SD02出土遺物(2)	20	図41、環濠断面復元図	38
図20、SD02出土遺物(3)	21	図42、土器形式分類概念図	39
図21、SD02出土遺物(4)	22	図43、土器形式の消長図	40
図22、SD02出土遺物(5)	23		

## 表 目 次

表1、刻印文書上器種年表 .....	41
表2、37次調査出土石器一覧 .....	42
表3、遺物觀察表1 .....	43
表4、遺物觀察表2 .....	44
表5、遺物觀察表3 .....	45
表6、遺物觀察表4 .....	46

## 図版目次

卷頭図版 1	1. 37次調査遠景（西から） 2. 37次調査近景（北から）
卷頭図版 2	1. A調査区SR03（上から） 2. A調査区SD02出土土器
図版 1	37次調査A調査区全景（西から）
図版 2	1. A調査区全景（南から） 2. A調査区全景（西から）
図版 3	1. A調査区SD001、SD02調査風景（西から） 2. A調査区SD01、SD02光面状況（西から）
図版 4	1. A調査区SD01全景（西から） 2. A調査区SD02全景（西から）
図版 5	1. A調査区SD01土層断面（西から） 2. A調査区SD02土層断面と遺物出土状況（西から）
図版 6	1. B調査区全貌（北から） 2. C調査区全景（南から）
図版 7	1. B調査区SD01近景（西から） 2. B調査区SD02土層断面と遺物出土状況（西から）
図版 8	SD02出土遺物

## 第1章 調査に至る経過

1992（平成4）年4月10日に福岡大同青果館（以下、甲とする）から、福岡市博多区那珂6丁目314番地他における青果加工工場建設に関する埋蔵文化財事前審査願申請（受付番号4-2-9）がなされた。工場建設は市道博多駅五十川線拡幅（福岡市土木局事業）と関連するものである。福岡市教育委員会（以下、乙とする）では申請地が那珂遺跡群の南西隣接地であることから、事前の埋蔵文化財の確認調査の必要を認め、同年4月22日に第1次の試掘調査をおこなった。この段階では工場予定地に既存建物があったために試掘調査はその建物の周辺と、関連するプレハブ建物建設予定地部分を対象とした。試掘は四本のトレンチを設定した。その結果、全てのトレンチから竪穴式住居、柱穴、溝と推定される遺構が検出され、遺跡の存在が確認された。この結果を受けて、乙は検討をおこない、甲に次の三点を報告した。

- 1) 埋蔵文化財の存在が確認されたことから、文化財保護法に基づく書類提出と、建築工事に関する詳細な図面を含めた埋蔵文化財事前調査願いを提出されること。
- 2) 予定されるプレハブ倉庫は、確認された遺構面に影響を与える基礎構造によって建設すること。これについては設計変更図面提出の上、基礎工事に担当職員が立ち合うものとする。
- 3) 工場建設予定地は工事内容から工事に関わる部分の破壊は避けられず、発掘調査をおこない記録に残す必要があると判断された。発掘調査の範囲、期間、予算の決定のために既存建物解体撤去後に再度、試掘調査をおこなう。

その後、同年5月6日付けで上記建物建築に関する埋蔵文化財事前審査願申請（受付番号4-2-43）の提出を受け、5月12日、6月4日に甲乙は協議を重ね、再試掘実施日、調査日程などについて打ち合わせた。既存建物の解体は六月末に終了することが確認された。

同年6月30日に第2次の試掘調査をおこなった。試掘は二本のトレンチを建物予定地の長軸に平行して設置した。その結果、遺構が予定地の北半部分に検出された。南半部分は擾乱が広い範囲にみられ、遺構は検出されなかつた。検出された遺構は溝、柱穴などであり、分布密度は薄く、出土遺物から古墳時代後期から古代の時期のものと推定された。こうした成果を踏まえ、乙は発掘調査の対象面積、期間、予算の策定をおこない、甲に報告した。その後、両者は数回の協議を重ね、同年7月に甲と乙は発掘調査の受託契約を締結した。

## 第2章 調査の経過と保存策

発掘調査は1993（平成4）年7月20日から同年9月5日の予定で発掘調査を実施することになった。調査はまず重機によって、表上、擾乱部分の除去をおこない、次に入力により、遺構

の検出、調査を進めた。対象地は数回の削平や建物基礎工事によって、造構の破壊や、多数の擾乱がみられ、調査は困難を極めた。しかし、調査の進行にともない、検出した造構のうち、二条の構が企画性や出土遺物から二重の濠をもつ環濠集落の一部であり、国内最古の例となることが明らかとなった。乙はその重要性のため現地説明会と記者発表の必要を認め、同年8月11日にその旨を甲へ報告した。8月20日に記者発表、8月23日に一般市民を対象とした現地説明会を実施した。現地説明会では約1500人、また連日平均で約500人の見学者があった。

発掘調査は造構の写真撮影、尖端、環濠土層のはぎ取りをおこない終了した。造構は花崗岩マササを搬入して埋め戻し、9月5日に予定通り全作業を終了した。

なお、8月27日に甲と乙は二重環濠の保存についての協議をおこなった。その結果、甲より建物の施工、使用の契約不履行問題のため、建築計画を破棄しての遺跡保存は困難であるとの提言があり、設計変更による保存策を検討することになった。ここでは以下の2点を確認した。  
①予定される建物の基礎は杭と地中梁で構成される。造構の上に可能な限り盛り土をおこない、地中梁施工による造構の破壊を最小限とする。  
②現行の建築計画では地中梁と環濠ラインが数多く重なるため、許容の範囲内で建築位置をずらすこと。

上記2項については、乙が測量や検討をおこない、次の3点を9月10日に再度提示した。

- (1)地中梁の掘削深度に関わる設計GLの位置は可能な限り上げること。
- (2)許容範囲内における保存に最適の建物位置のずらしは南に5mとする。
- (3)環濠ラインと重なる既存基礎の位置を図面で示し、掘削や撤去作業には乙の担当職員が立ち合うものとする。

さらに、建築工事以後の保存、整備について乙より以下の提案がおこなわれた。

1. 建築建物から外に延びる環濠部分について、カラー舗装などによる表示をおこない、併せて工場敷地内に遺跡の説明板を設置する。

2. 環濠部分の福岡市指定文化財認定の同意をお願いしたい。

3. 今後、工場敷地内の埋蔵文化財の保護について一層のご協力をお願いしたい。

これらの提案については、甲より基本的内諾を得られたが、2.について改めて文書による立案がもとめられた。これらは乙により実施計画が進められている。

なお、発掘調査終了後の1993（平成5）年5月に市道博多駅五十川線に沿った福岡大同吉果株式会社敷地の擁壁工事が計画された。その対象地は1992年度調査地の南側にあたり、道路に平行する幅2m、長さ約130mの範囲である。これについては甲、乙協議の上、同年5月26日から5月31日、6月8日に立ち合い調査を実施し対応した。

また、これと平行して同社第6倉庫跡地において造構確認調査をおこなった。対象は約250m<sup>2</sup>の範囲であった。これは環濠内の造構の遺存状態を調べる目的で実施した。

## 第3章 調査組織

本遺跡の調査にあたって以下の組織を準備した。また、調査、整理作業過程において各方面的協力をお願いした。

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第2係

教育長 井口雄哉（1992年度）、尾花 剛（1993年度）

部長 花田兎一（1992年度）、後藤 直（1993年度）

課長 折尾 学

第2係長 塩屋勝利（1992年度）、山崎純男（1993年度）

調査庶務：中山昭則、吉田麻由美、寺崎幸男

事前審査、試掘調査：横山邦繼、荒牧宏行

調査担当：吉留秀敏、井英明

調査作業：上野龍夫、別府俊美、徳永静雄、大町正弘、松井一美、亀井好明、斎藤武雄、小早川邦雄、関義種、神川健次郎、田出橋和男、城戸健、小原康義、藤野雅基、

清水邦博、古賀典子、江越ハツヨ、関加代子、山崎悦子、藤野信子

整理作業：尾崎君枝、甲斐田嘉子、木村良子、丸井節子、宮坂理、星子輝美、森部順子

調査・整理協力：柳田純孝、杉山富雄、本出光子、下村 智、宮井善朗、菅波正人、池田祐司、長屋 伸、榎本義嗣、尾山 洋、奈良康正、米村岳尚、吉田学、佐藤亞聖、久賀降芳、立石真二、藤信子

調査、整理にあたっては下記の方々、機関のご教示、ご指導やご援助を賜った。記して謝意を表したい。（順不順、敬称略）

桑原敬一、横山浩一、渡辺正気、小田富士雄、西谷 正、佐原 真、水野正好、亀井明徳、高倉洋彰、田中良之、武末純一、安楽 効、下條信行、橋口達也、田崎博之、平田定幸、平井勝、平井泰男、光永真一、中間研志、徳永博文、大谷治孝、久住猛雄、田中潤子、篠塚ひろ子、角田文衛、西井芳子、西田泰民、舟山良一、木村幾太郎、森下靖士、城戸康利、塙地潤一、山村信榮、池ノ上宏、藤尾慎一郎、高久健二、金元龍、家根祥多

福岡大同青果㈱、日通不動産㈱、㈱森山工務店、㈱安部工務店、㈲久良木建設、㈲空中写真企画、西日本建造物解体㈱、㈲ガイドーカメラ

## 第4章 地理的歴史的環境

### 1) 那珂遺跡群の位置と立地条件(図1)

那珂遺跡群は福岡平野のほぼ中央にある火山灰台地に立地する先土器時代から中世にかけての複合遺跡である。今次の調査地点はこの遺跡群の南端付近に位置している。

福岡平野は背後を背振山塊、三都山塊に囲まれ、北に玄海灘に面する開放形の沖積平野である。平野を貫流して南から那珂川と御笠川が流れ、両河川の周辺には開析の進んだ丘陵や段丘が残されている。この遺跡の立地している那珂川流域は左岸を油山(592m)からのびる標高100~20mの花崗岩を基盤とする丘陵が頂面高度を北位に下げてのびている。右岸は標高100~40mの春日丘陵と呼ばれる花崗岩基盤の低丘陵からなる。何れの丘陵も浸食が進み樹枝状の丘陵となっている。那珂遺跡群は春日丘陵から連続して島状に連なる低丘陵上に立地する。調査地点は那珂・比恵台地の南端付近に位置している。北側の比恵遺跡群、南側の五十川遺跡群とは連続した台地上に途切れることなく分布しており、本来連続した一連の遺跡である。台地上は標高5mから11mであり、起伏の少ない平坦な地形である。台地の東西と南側は沖積地であり、近年まで広い水田地帯であった。

### 2) 那珂遺跡群の調査研究と成果



図1、周辺遺跡分布図 (1/100,000)

那珂遺跡群での考古学的調査は1971年の九州大学考古学研究室による最初の発掘調査以来、1993年現在46次におよんでいる。これらの調査の結果、遺跡は台地の全域に分布しており、各時代ともに重要な成果が得られている。以下では同じ台地に立地する比恵遺跡群とともに、その概容を記したい。

先土器時代については那珂遺跡群に7カ所、比恵遺跡群に3カ所の遺物出土地点がある。何れもナイフ形石器段階後期のものである。しかし、ほとんどの地点では後世の擾乱内から遺物が出上している。台地上は後世の開発のために新規ローム層の保存が悪いが、38次地点では遺物集中分布域が確認されている。

縄文時代も後期までは明確でない。しかし、前時代同様に那珂、比恵遺跡群の各所に縄文時代早期から晩期前半の間に位置付けられる土器片、石鏃、石匙などが断片的に認められている。縄文時代晩期後半から弥生時代前期初頭になると那珂遺跡群に2カ所、比恵遺跡群に2カ所の集落跡がある。竪穴式住居、貯蔵穴群などの遺構や台地縁辺の斜面に形成された包含層などがあり、土器、石器、土製品などが出土している。

弥生時代前期中葉から中期前葉になると、比恵遺跡北側で集落の拡大がみられる。

弥生時代中期中葉から後期前葉になると、比恵遺跡、那珂遺跡とともに台地上のほぼ全域が集落化する。この時期になると遺跡の性格も多様となり、環濠、斐拾墓群、井戸群、青銅器生産遺跡などが確認されている。遺物にも土器類、石器類、金属器類、石製漁撈具、各種木製農工具類、木製品、漆製品、各種自然遺物など豊富である。

弥生時代後期中葉から同末葉にも、集落は継続し、出土した土器類の中には瀬戸内、近畿系の搬入品も認められる。博多湾に近い立地から遠隔地との交流があったとみられる。

古墳時代前期には台地のほぼ中央に那珂八幡古墳が築造される。全長約85mの福岡平野最初の前方後円墳である。この時期の集落は、那珂、比恵両遺跡に広く分布し、近畿系の土器類を多用する集落となる。

古墳時代中～後期には那珂、比恵両遺跡の各所に集落が展開するが、その他に大型建物や柵列など、企画性の高い施設も台地上の各所で確認される。記録に残る「那津官家」の関連施設であるとする見解も示されている。また、那珂八幡古墳の北約500mに剣塚北古墳、東光寺剣塚古墳の2基の前方後円墳が築造される。後者は、巨石の横穴式石室や三重の周濠を持ち、同時期では総長約140mと筑前地域で最大規模である。

古墳時代終末から古代にはおもに那珂遺跡を中心に正方位に主軸をとる溝、大型建物、井戸などがあり、瓦類、硯、越州窯系青磁、灰釉陶器などが多く出土する。何らかの官衙施設が展開していたと推定される。

中世には台地上に区画溝を巡らした居館遺構が各所にあり、周辺地域に対してなお中心的役割を保っていたと考えられる。

## 第5章 調査の記録

### 1) 調査方法

37次調査地点は建物建設予定地であり、周辺の現在の道路、鉄道に沿っておおよそN—Sに長軸をもつ長方形の範囲である。範囲は幅約29m、長さ約40mの広さである。試掘調査の結果、調査地は相当の削平を受け、造成土を除去するとすぐに遺構検出面となることが判明していた。したがって、遺構検出面直上まで重機で掘り下げ、遺構検出、掘り下げは入力により行った。調査用グリッドは調査範囲に平行して、6mを基本単位とする区画を設けた。各グリッドの名称は北東端を起点とし、南方向に1、2、3…、西方向にA、B、C…と付けた。

立合い、確認調査地点は37次調査地点と、同軸の方眼グリッドを設け、調査を実施した。

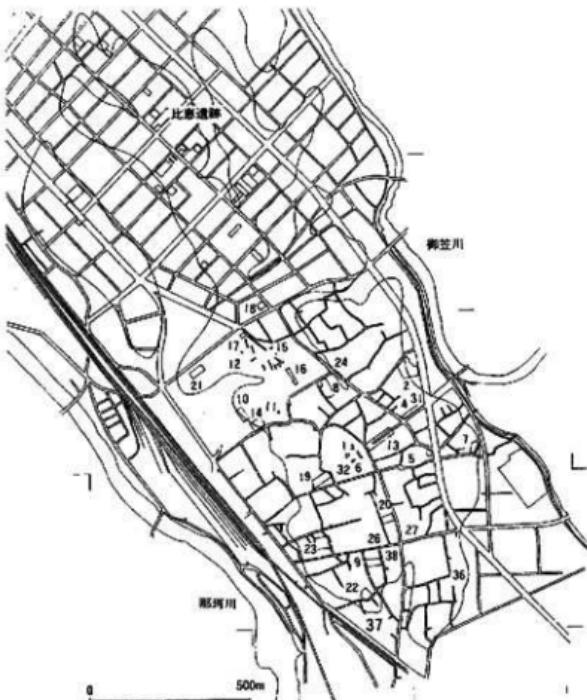


図2、那珂比恵遺跡群調査位置図 ■数字は那珂遺跡調査次数を示す

## 2) 地形と基本層位

福岡平野における段丘は高位・中位・低位の3面に区分されている。那珂川下流右岸の台地に位置する本遺跡は中位段丘Ⅱ面にある。基盤は花崗岩であり、段丘上部をAso-IV火砕流が覆っている。台地と那珂川の間は沖積地であり、低位段丘の形成はない。低位段丘は本遺跡の上流約2kmの横手付近まで認められるが、ここより下流の右岸中位段丘崖は那珂川の突擊面となり、未形成か、浸食されたものと見られる。

これまでの周辺の遺跡、地質調査の結果、台地上の基本層序は下位からAso-IV火砕流に該当する八女粘土、島柄ローム、さらに新期ローム層と続き、クロボク層、表層土壌となっている。地層の保存状態の良好な那珂遺跡各地点や比恵遺跡18次地点でみると、島柄ローム層が2~3mの層厚であり、新期ローム層より地表までは谷部でも1mの層厚を越えることはまず無い。

今次調査の結果、37次及び確認調査地点では、地表下すぐに島柄ローム下部が現れ、付近は相当の削平を受けていることが明らかとなった。立合い調査地点の南端では島柄ローム上部が見られ、この部分では削平が比較的少ないことがわかる。

本調査地点と周辺は道路、鉄道、工場、倉庫などが設けられている。それらの建設とともに、造成工事がおこなわれ、現在は旧地形を窺うことが困難である。明治末年の地形図(図5)や、地元の聞き取りによるとこの一帯はおおよそ南北250m、東西150mの範囲ではほぼ独立した台地をしており、周辺よりひときわ高くなっていた。1940年代の地形図では台地上に標高11mの等高線が記されている。調査した3地点の現地表の標高は約9mである。台地の中央付近では最大で約2mの削平がおこなわれたとみられる。

こうした点から本調査地点は、近年の造成工事により地形が著しく改変されており、層序もAso-IV火砕流上部まで削平されているために詳細は不明である。



図3、37次調査周辺地形図 (1/9000)



図4、IH地形図（1940年代）（1/9000）



図5、IH地形図（1920年代）（1/9000）

### 3) 調査の概要

#### I、試掘調査

試掘調査は調査対象地とその東側の工場、倉庫敷地内についておこなった。何れも重機により表土、客土を除去し、造構の確認をおこなったのみである。造構検出面は鳥栖ローム下部であり、一帯は相当の削平があったとみられる。第1次の試掘では4箇所に長さ4~6mのトレンチを設けた（A~Dトレンチ）。Aトレンチでは柱穴、竪穴式住居跡（？）を検出、土師器小片があり、古墳時代か。B、Cトレンチでは柱穴、Dトレンチでは幅2.5mの溝（後のSD02）を確認、時期不明。第2次の試掘では建物の基礎を避けて2本のトレンチを設けた（E、Fトレンチ）。Eトレンチでは北端に竪穴式住居跡、中央に溝（SD02）、Fトレンチでは北側に二条の溝（SD01、02）、柱穴を確認した。造構の密度と遺物は少ない。

#### II、A（37次）調査区

##### 1) 調査概略

調査対象地は倉庫跡地の幅約30m、長さ約40mである。重機を用いて地表部の客土を取り除いた。造構の破壊を避けるために建物の基礎はそのまま残し、後は人力で掘削作業をおこなった。調査区内は戦前の製油工場、戦後の米倉庫、青果工場などの建物基礎が縦横に残り、また多数の攪乱がみられた。それを除去し、また避けながら造構の検出、調査を進めた。その結果、溝2条、掘立柱建物1棟、土壙1基、柱穴約40を検出した。なお、当初時間的制約から溝SD01を

一気に掘り上げてしまった。その後SD02の調査をすすめ、2つの溝が同時期の環濠である可能性が出た。しかし、SD01の遺物取り上げの不注意がその解決を運らせることになった。

## 2) 検出遺構と遺物

1. 溝SD01：調査区北東側に長さ約35mを検出した。略東西に軸を取る断面V字形の大溝である。著しい擾乱のために検出面において溝の両側の上面を確認できる部分は少ない。このため溝の上面では明確でないが、床でみると平面は南側を内に緩い弧を描いている。溝の規模は調査区内で変化がみられる。僅かであるが、西側で広く、深くなり、東側に浅く、狭くなる。西側で幅約4.9m、深さ約1.5mを測り、東側で幅約4.2m、深さ約1.3mを測る。溝の壁面の傾斜は30~40°を測る。溝内の堆土は大まかに3区分される。上層は黒褐色軟質土であり、風化土層である。中層は黒褐色~茶褐色上であり、下位にしたがい堅く締まる。下層は灰褐色~暗灰色上である。中、下層はスコップで掘ることが困難なほど堅い堆土であった。なお中層付近から壁面は八女粘土層となり、下層はその水性作用による二次的堆積物とみられた。また中層より上部の溝両壁面には無数の小さな凹凸がみられた。これは動植物生痕と考えられる。

遺物はまず本遺構検出時に埋土最上部から古墳時代後期の遺物を採集した。次に弥生時代中期後半の遺物が主に上層に出土した。特にB2・3区付近では投棄されたような集中状態であった。さらに中層、下層は少量の遺物が出土した。遺物の層位的取り上げをおこなっていないので厳密ではないが、これは主に弥生時代前期以前の遺物であった。中層と上層の間の遺物にみる時期差が大きいことから、遺構の切り合（掘り直しも含めた）の可能性も強いが、層位、遺構面に明瞭な不整合面を確認できなかった。

図10は最上部から出土した須恵器類である。1~5は杯蓋、6は器台、7は高杯脚部、8は椭、9、10は壺片である。これらは5世紀後半のもの（1~3、6、7）と、6世紀後半のもの（4、5、8~10）に分かれる。

図11~14はおもにB2・3区の溝内上部で集中して出土した遺物である。11は蓋、12~36は壺、37は人面、38~48、51~54は壺、49、50は高杯、55、57は鉢、58~63は器台、64~92は壺か蓋の底部である。これらのうち、30~34、52、82、83、92は弥生時代後期中葉、35、36は古

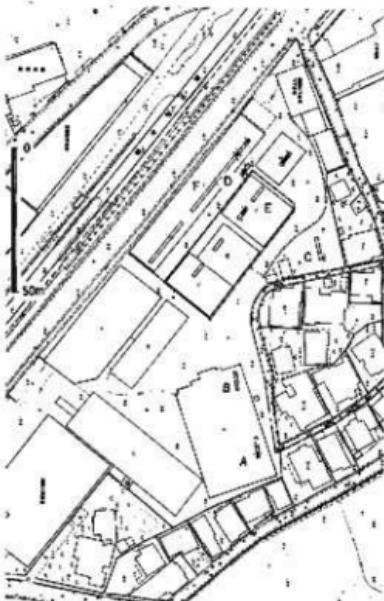


図6、試掘調査地点配置図 (1/2000)

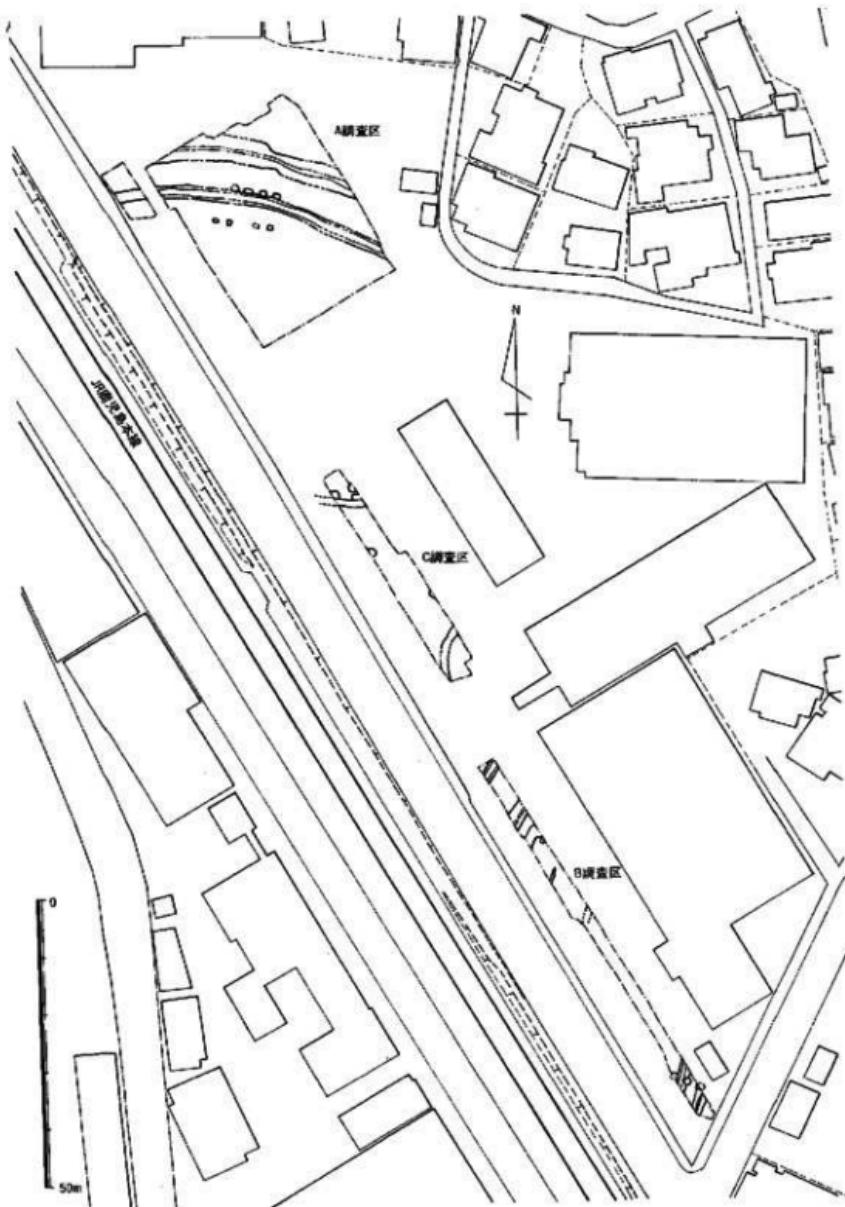


图 7、37次调查地点配置图 (1/1000)

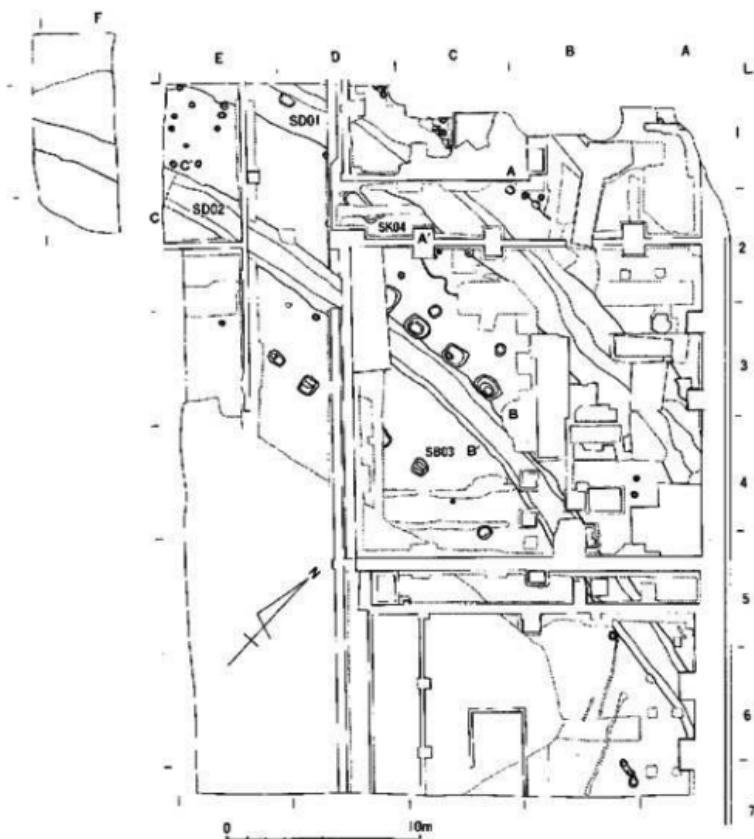
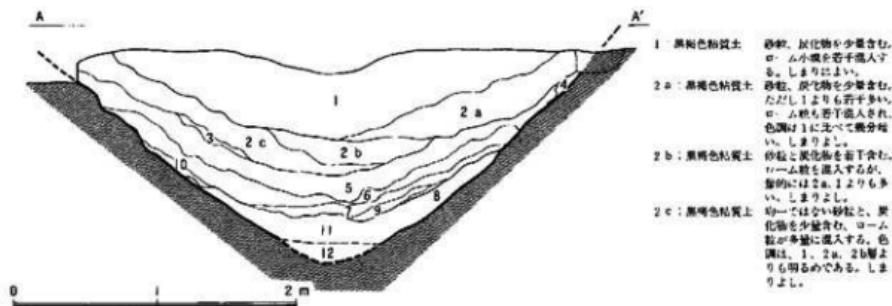


図8、A調査区平面図 (1/300)

墳時代後期に位置づけられるものであり小片が多い。その他は全て須歎II式土器であり弥生時代中期後葉から末葉に位置づけられるものである。

図15はおもに中～下層に出土した遺物であり、図化できるものは全て示した。一部上層で出土した同時期のものも含めている。93～104は甕である。93は甕3類、94～96は甕4類、97～104は甕1・2類である。117～131は甕底部である。130、131は底部が厚く前期末から中期初頭の特徴を持っている。105～116は壺である。105は壺1類、106、107は壺2類、108は壺3類である。107～113は壺底部である。107、108は円盤貼りつけにて底部を造り出している。

これらの遺物は夜臼式から板付II式、そして城ノ越式に位置づけられるものであり、相当の



3 : 黒褐色粘質土  
粗く均一ではない砂粒や、ローム段を少量混入する。  
しまりはよいがややかたい。  
4 : 黒褐色粘質土  
上面を塊状で大きい砂块もその盛り上がり込みが見られる。  
砂粒、ローム段も多量に混入する。しまりはよい。  
5 : 黒褐色粘質土  
砂粒、炭化物を若干含む。段分のし、木こみも見られる。  
ローム段が多量に混入し、土の質は2cに近い。  
色調は暗めである。しまりはよい。  
6 : 黒褐色土-褐鉄質土  
砂粒、炭化物を若干含む。段分のし、木こみも見られる。  
ローム段が多量に混入する。しまりはよい  
かやや粘質である。

図9、溝SD01土層断面図 (1/40)

時期幅がある。調査時に厳密な層位的取り上げをおこなっていないために、本造構に本来ともうなう遺物と、二次的に含まれた遺物の区分を明らかに出来ない。

図17はSD01から出土した石器類である。132は黒曜石の角礫を素材とする石核、134～137は砥石、138、139は扁平打製石斧である。打製石斧は刃部などを欠損するが、復元すると全長10cm前後のものとなる。

2. 溝SD02：調査区中央付近にSD01と並行してその南側に長さ約47m検出した。断面逆弓形の溝である。SD01と同様に南側を内とする緩い弧を描いている。溝の規模は調査区西側で幅約2.0m、深さ約0.8mを測り、東側で幅約1.7m、深さ0.6mを測る。床面はほぼ平坦であり、幅0.8～1.0

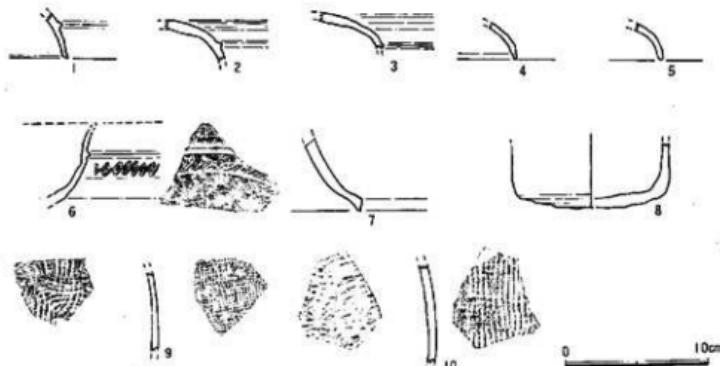


図10、SD01最上部出土遺物 (1/4)

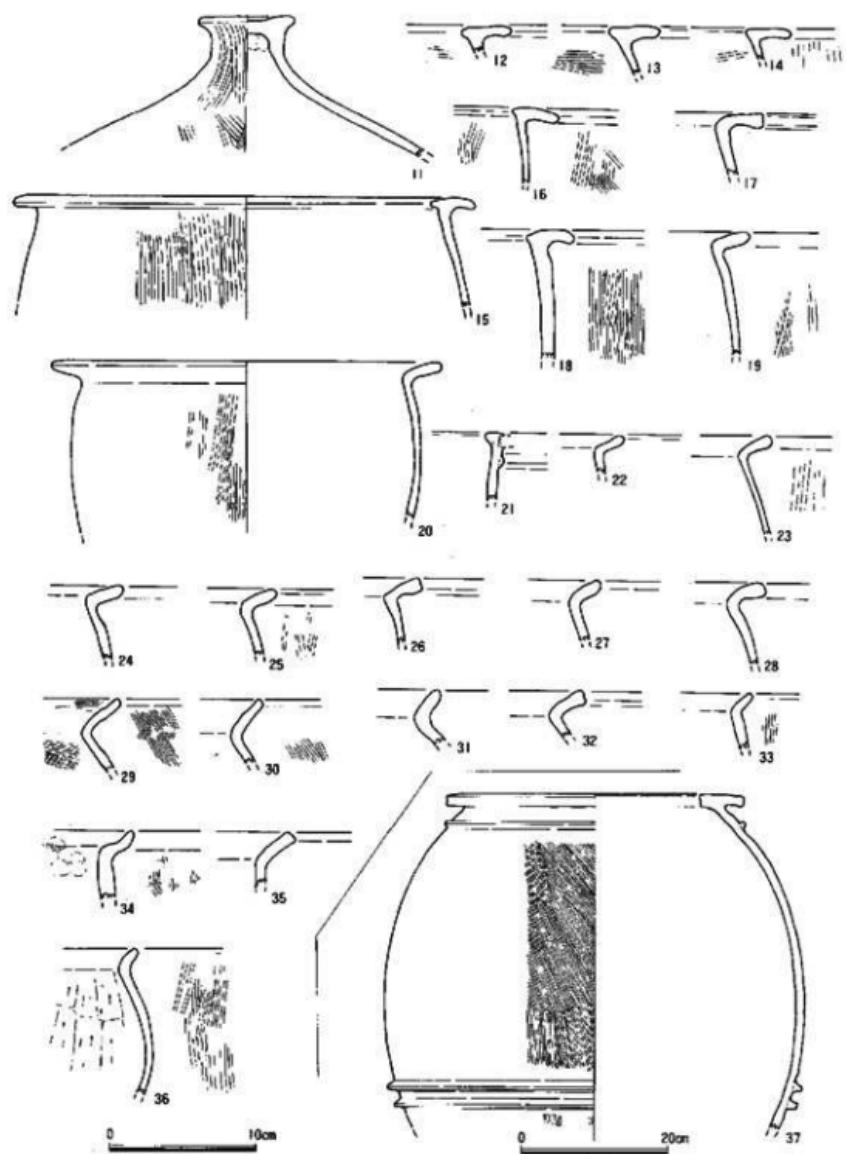


图11、SD01上部出土遗物(1) (1/4, 1/8)

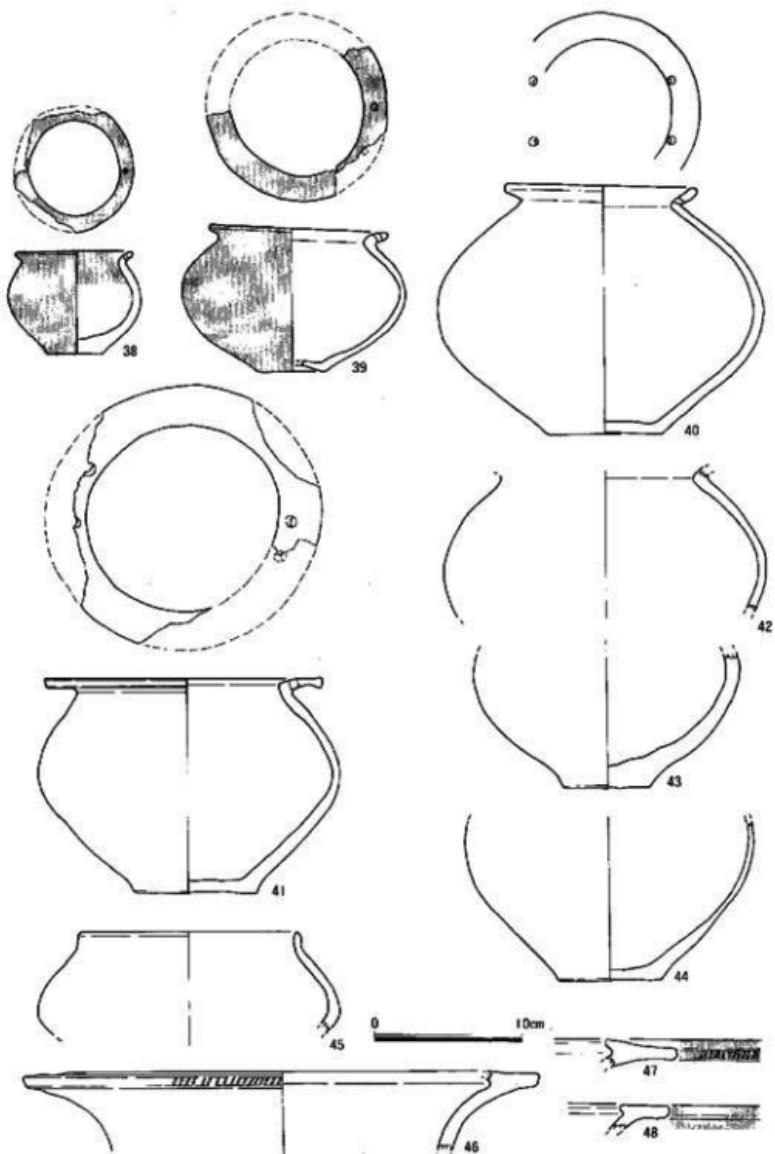


圖12、SD01上部出土遺物(2) (1/4)

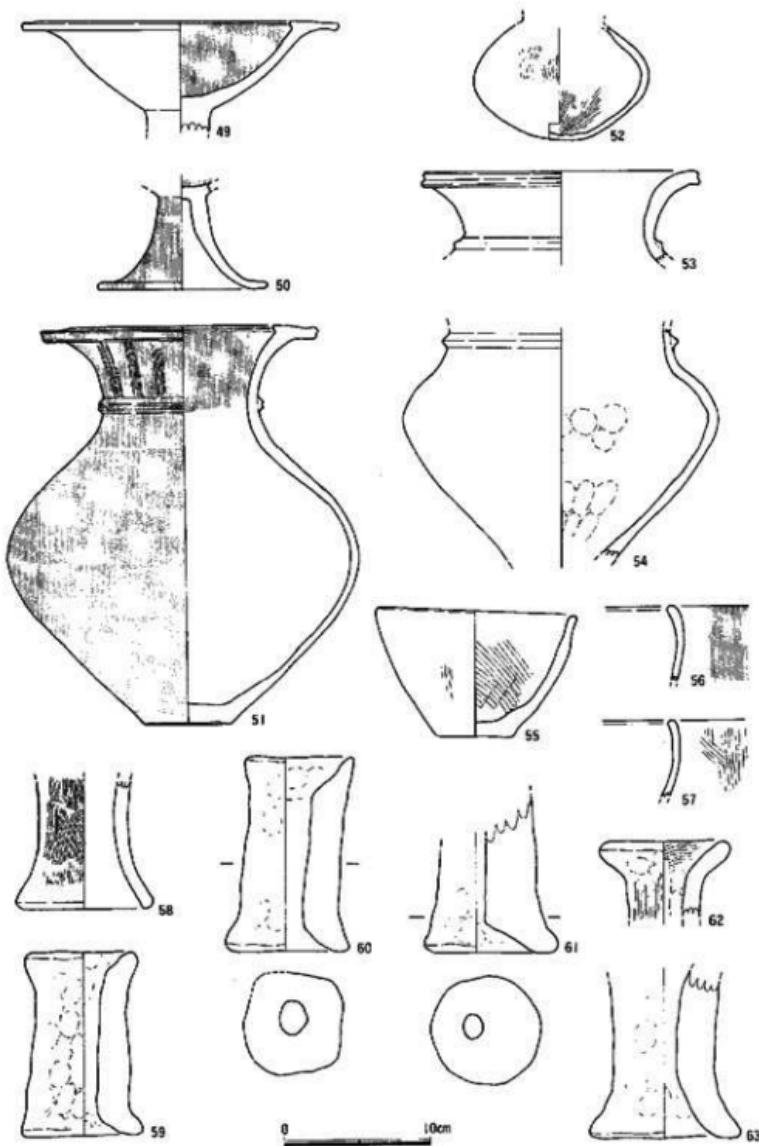


図13、SD01上部出土遺物(3) (1/4)

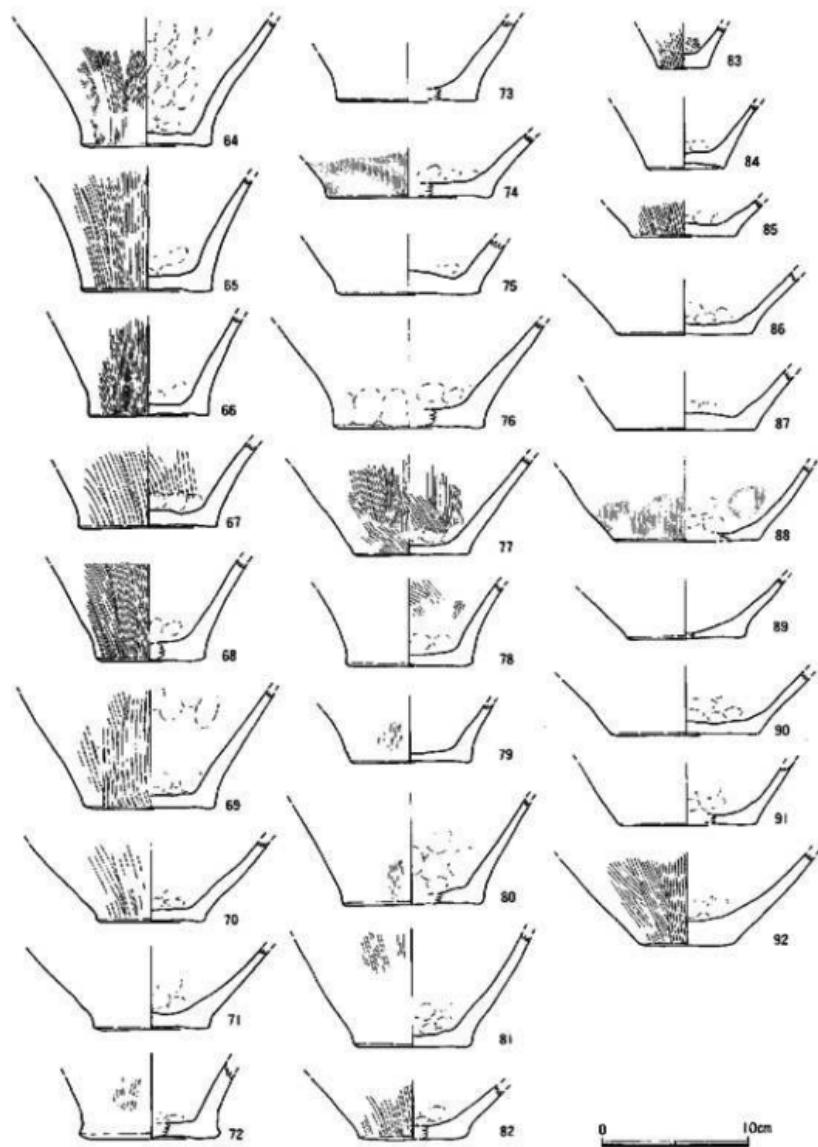


图14、SD01上部出土遗物(4) (1/4)

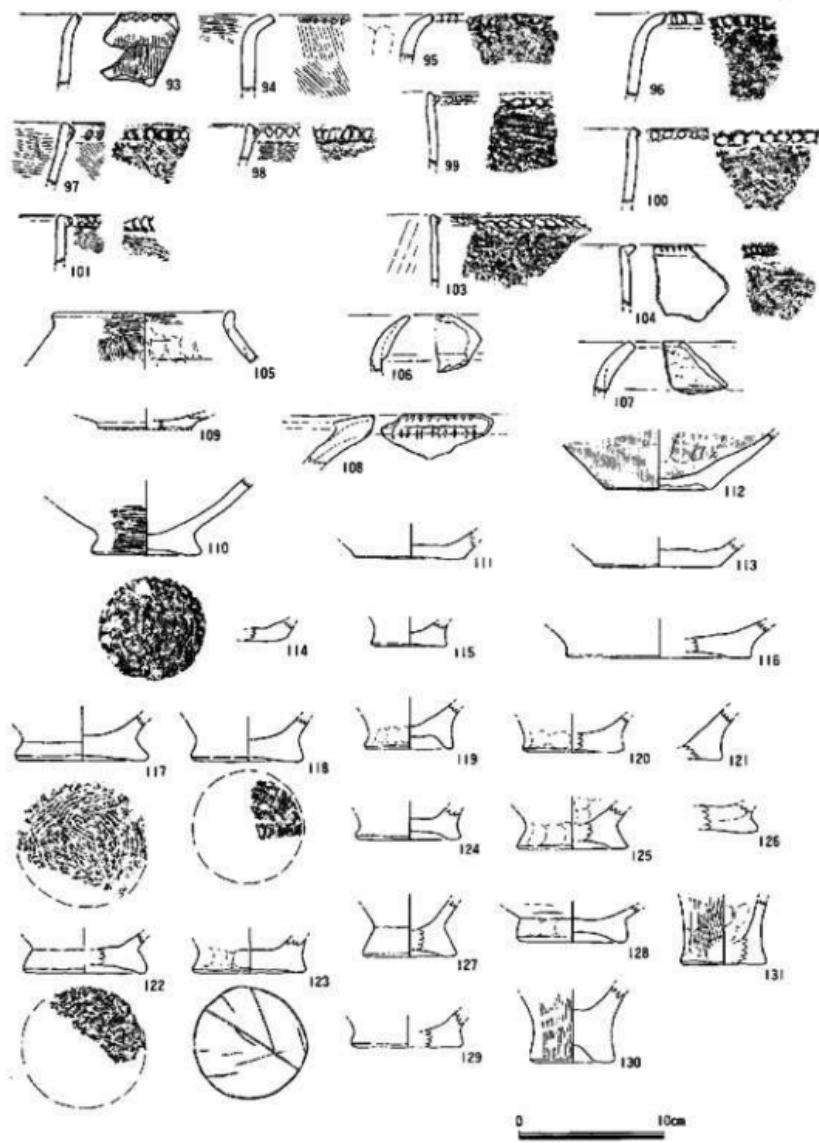


圖15、SD01中～下部出土遺物 (1/4)

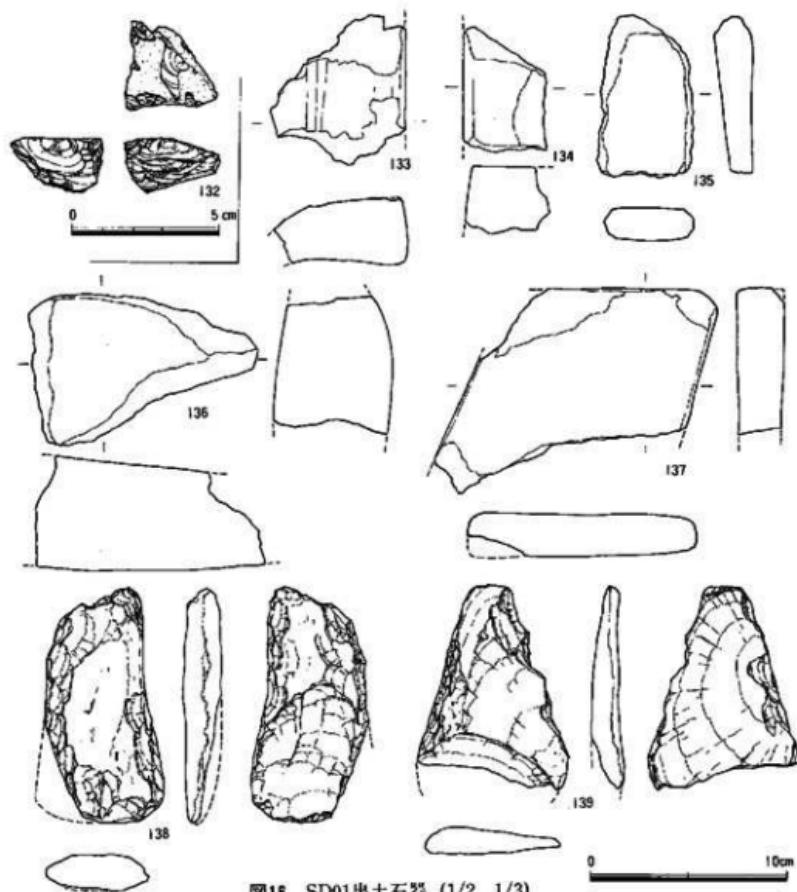
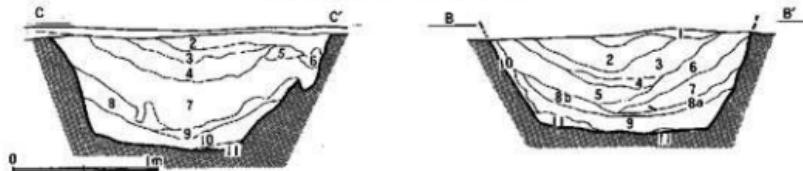


図16、SD01出土石器 (1/2, 1/3)



1. 黒褐色ローム塊混り粘土上。(一部擾乱層)混入の可能性あり。
2. 黑褐色土。5mm大少量。3mm以下のローム塊多く含む。よくしる下層に泥棒。
3. 黑褐色土。2mm大少量。3mm以下のローム塊多く含む。上層より茶褐色土へ。
4. 茶褐色土。1mm大少量。ムラ少量。3mm以下のローム塊を多く含む。クロゴク質の黑色土を底材にみとめる。
5. 黑褐色土。2-3cmの大ココリ見。3mm以下のローム塊を多量に含む。腐朽物が少量含む。
6. 黑褐色土。クロコリ少。3mm以下のローム塊多く含む。灰化物含む。硬くしまる。

7. 始初色土。やや茶味が強く。3mm以下のサーム塊を多量に含む。
- 8a. 黑褐色土。ややクリボク質土。下位に黒帯強く。上部に1-2mm以上のローム塊を多く含む。
- 8b. 茶褐色土。以下ではローム塊(1-2cm)多く含む。上部では5mm以下のローム塊多く含む。
9. 黑褐色土。3mmのローム塊多く含む。茶褐色土層入とごれた盛。
10. 茶褐色土。灰化物を含む。
11. 黑褐色土。毛細孔質土のみ認められる構造土をハイ合む。

図17、溝SD02土層断面図 (1/40)

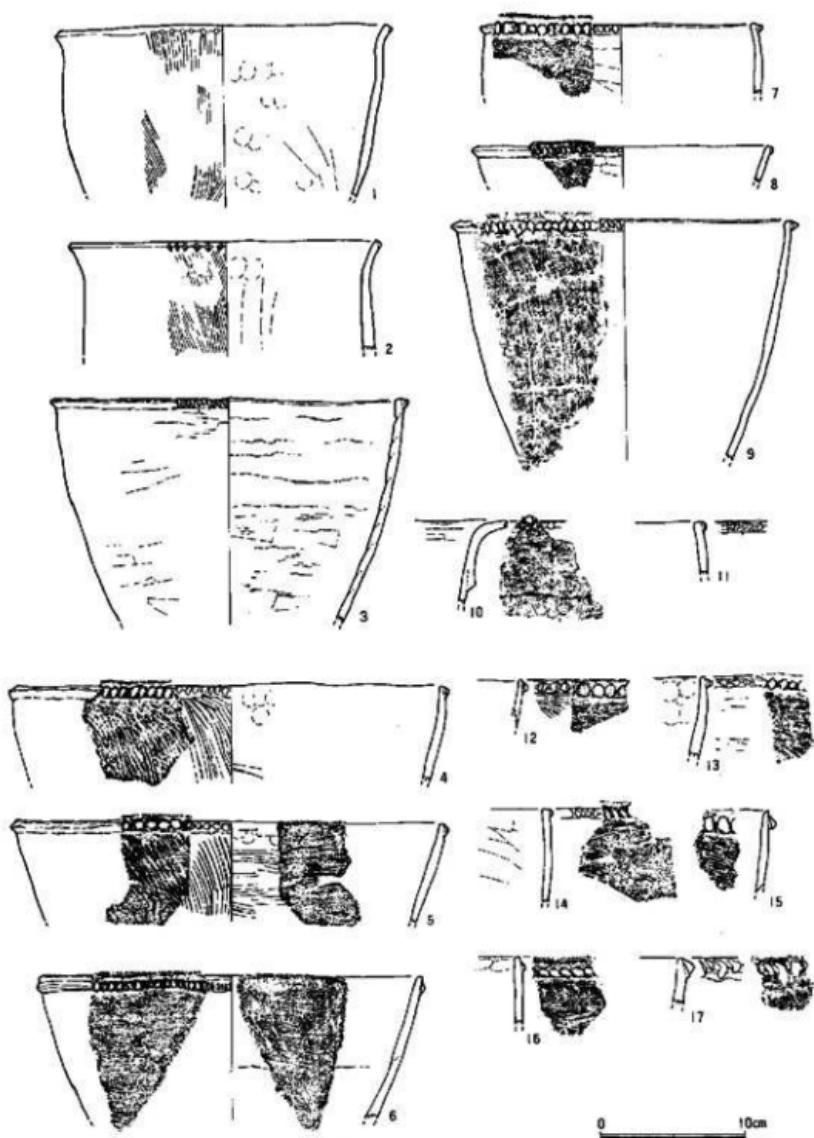


図18、SD02出土遺物(1) (1/4)

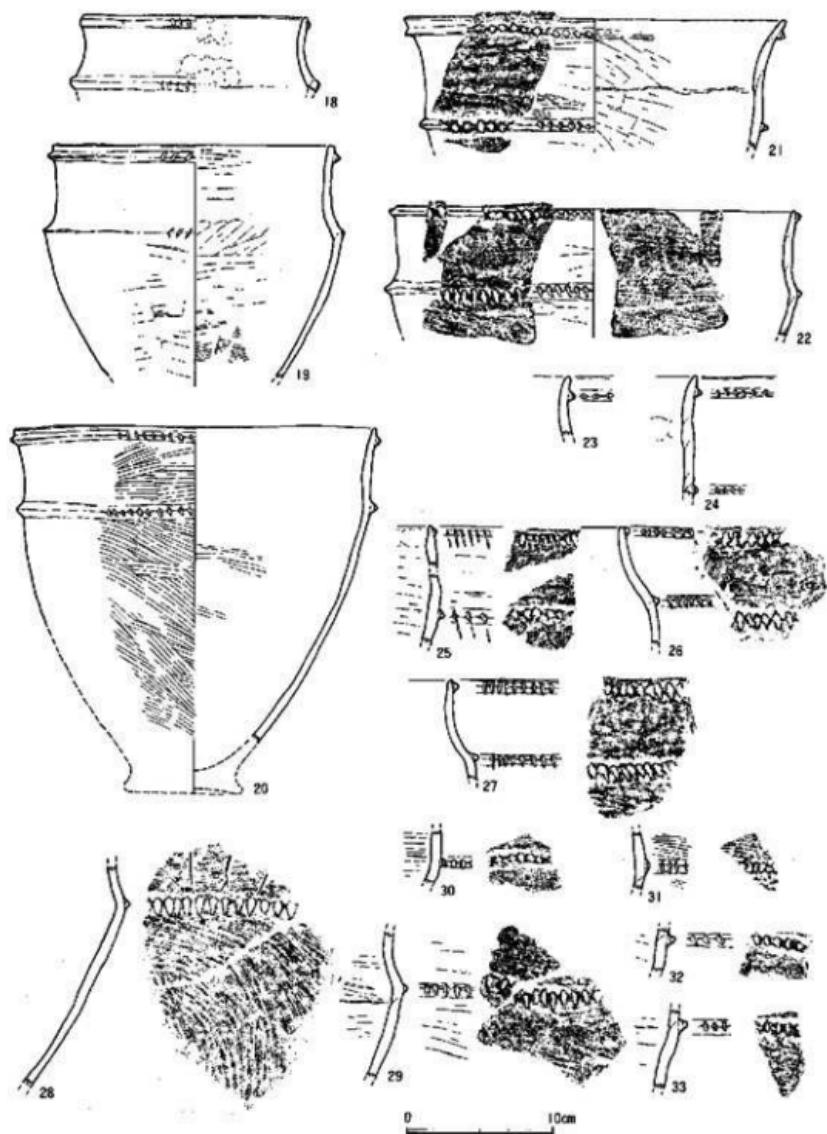


图19、SD02出土遗物(2) (1/4)

mを測る。壁面の傾斜は両面ともほぼ同じであり、50~60°を測る。鳥栖ローム下部から一部は八女粘土層に達している。SD01と同様に壁面や床面には無数の小さな凹凸がみられた。溝内の埋土は比較的均質の黒褐色土であり、中、下位に微細な地山小土塊を含む土層の介入がある。埋土中の最下部、床面から5~15cm上位の埋土中に集中して遺物が出土した(図版5-2)。中~上位には遺物の出土は少なく、少量の土器片が出土したのみである。

図18~23はSD02から出土した遺物である。1、2は甕3類、3~9、11~17は甕1類、18~33は甕2類である。10は甕5類、これは破片であり鉢の可能性もある。34~54は甕類の底部である。55~78は壺1類である。75、76は彩文土器で腹部上位に赤色顔料で三角文を施す。87~104は壺底部である。79、80は浅鉢、81、82は鉢(深鉢)である。83~86は高杯であり、84と85は同一個体とみられる。

図24は土製品と石器類である。105は紡錘車であり、半欠品であるが直径5.6cmに復元される。106は石鎌であり、黒曜石製で先端部を一部欠損する。復元すると長さ3.7cm、幅2.4cm、厚さ0.4cmを測る。本調査で唯一の出土である。109は偏平打製石斧の棒部である。108、110は柱状片刃石斧の破片である。108は基部であり、表面は剥離調整部が卓越し、研磨面は縁辺部のみにみられる。110は基部側縁の碎片である。111、112は円錐面に研磨痕がある。磨石か。112は敲打痕

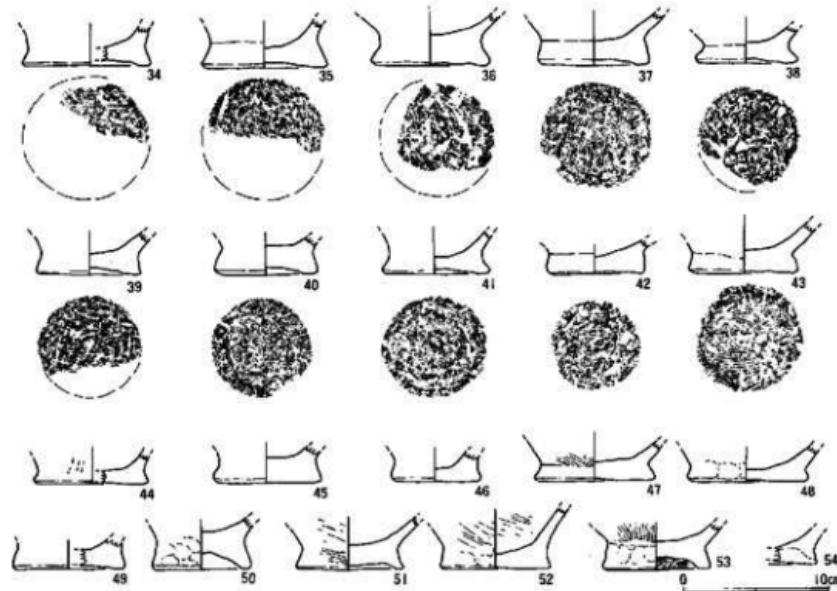


図20. SD02出土遺物(3) (1/4)

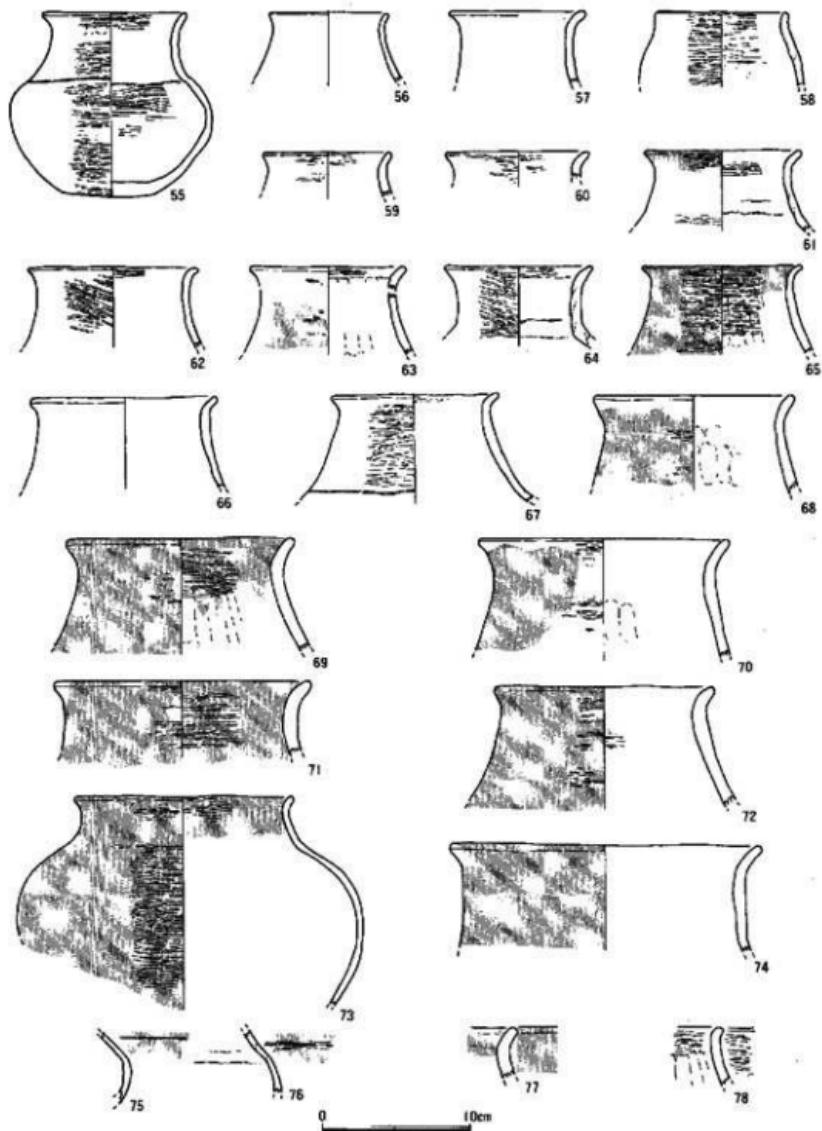


圖21、SD02出土遺物(4) (1/4)

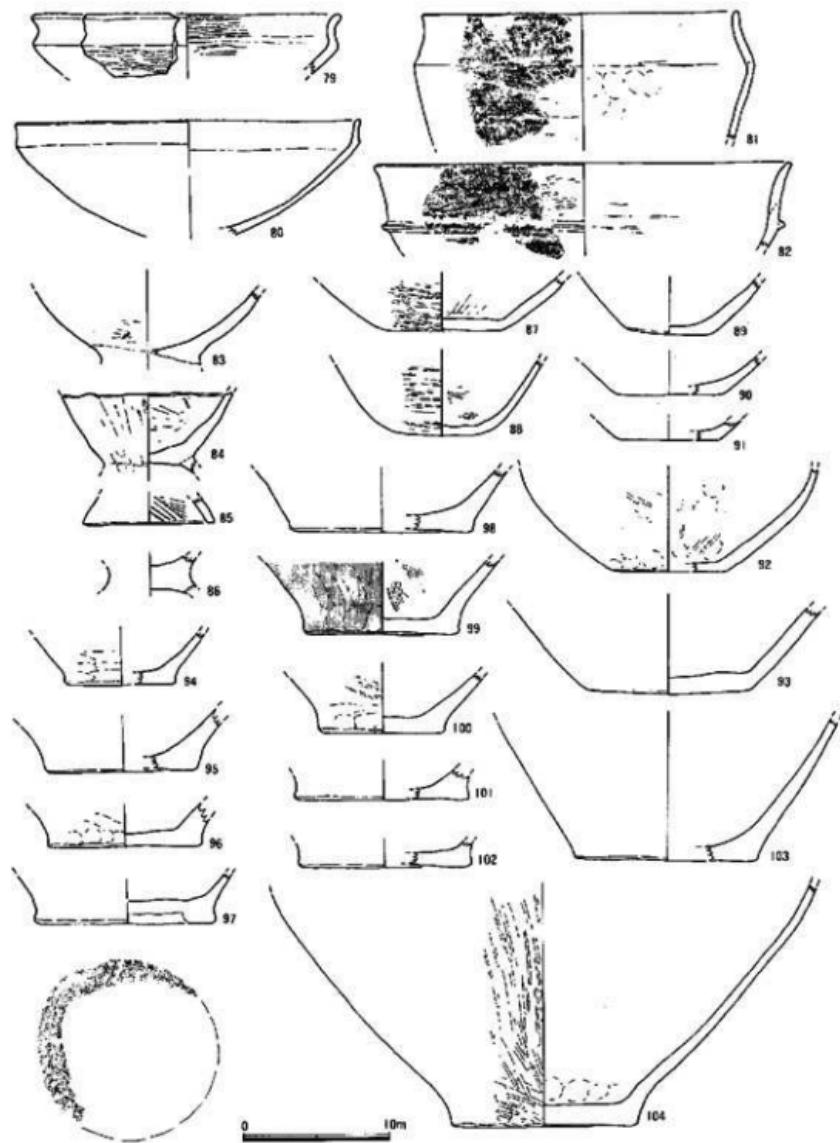


圖22、SD02出土遺物(5) (1/4)

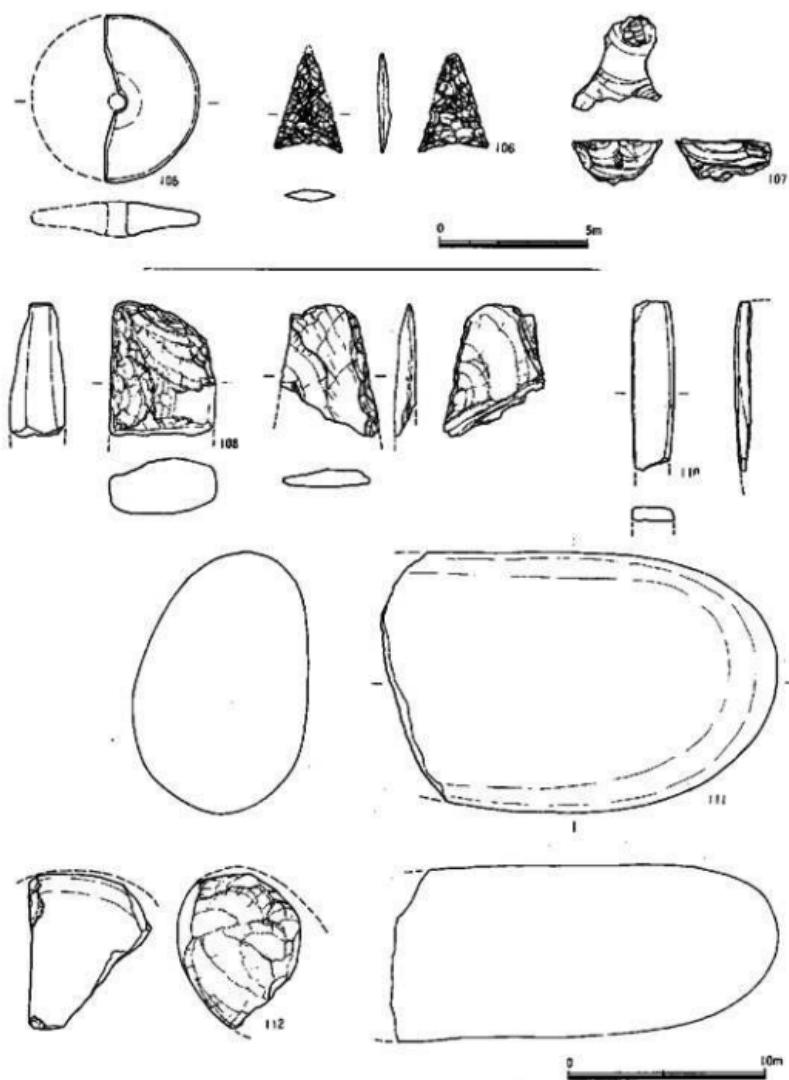


圖23、SD02出土石器、土製品 (1/2、1/3)

がありたたき石に転用している。107は剝片素材の石核である。石材は黒曜石である。

3. 挖立柱建物SB03：調査区中央付近のC-E-2~4区で検出した。SD02を跨ぎ、溝北側を切っている。主軸方位をN-81°-Wに取る1間×4間の側柱建物である。北西端と南中央の柱穴を欠く。西梁中央近くに小穴があるが、開通するかは不明である。桁行長970cm、梁間長534~582cm、床面積54.13mを測る。柱穴掘方平面は隅丸方形を呈し、規模は南側の側柱列が80×70cm前後、北側の側柱列が120×100cm前後であり、後者が大きい。柱痕は明確でない。掘方埋土内から少量の土器片が出土した。

1、2は腰の口縁部、3、4は底部である。1、3は須歎II式土器、2、4は衣臼式土器片である。後者は混人とみられ、この遺構は、弥生時代中期後葉に位置づけられる。

4. 土壙SK04:D1~2区で検出した。東西方向に主軸をもつ土壙である。平面は不整の分銅形を呈する。土壙の中央と西側を擾乱で壊されている。規模は東西約2.0m、南北約1.0mを測る。深さは現状で約0.2mであり、床面はほぼ平坦である。埋土は黒色土であり、堅く締まっている。埋土中から少量の土器片が出土した。焼化できるものはないが、腰片のハケ日調整の度合いから弥生時代中期以降のものとみられた。

5. その他の遺構：この他に柱穴50ほどが検出された。しかし建物が構成されるものはない。何れも直径20cm以下であり、埋土は黒色土である。埋土中に僅かな土器片が出土しているが、ほとんどが弥生時代中期以降のものである。

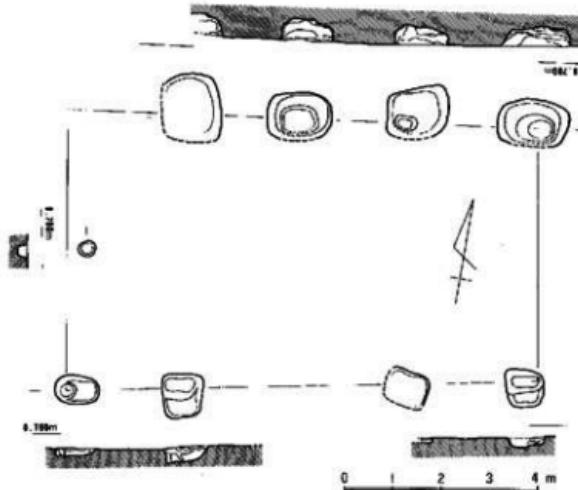


図24、掘立柱建物SB03実測図 (1/120)

図27は遺構検出時の出土したもので、何れも遺構からの遊離遺物である。1は搗堅石製の石核である。自然面打面である。2~4は灰白式土器の底の底部である。

### III. B(立合い) 調査区

#### 1) 調査概略

調査対象地は道路に平行する幅2m、長さ約130mの範囲である。調査前は舗装された駐車場であった。工事範囲の舗装部分をカッターで切断し、その後重機で土までを取り除いた。後は人力で掘削作業をおこなった。客土の直下は鳥居ローム層となっている。調査区内は部分的に搅乱がみられたが、遺構の保存は比較的良好であった。調査の結果、溝7条、土壙3基、柱列1、柱穴などを検出した。溝のうちSD01とSD02は並行し、規模と形態、さらに出土遺物がA調査区のSD01とSD02と共通する。また、A調査区からの環濠復元線とほぼ一致することからも両者が連続する同じ遺構であると考えられた。

#### 2) 検出遺構と遺物

1. 溝SD01：調査区北側のA7区において検出した。溝の南側半分を古代末の溝SD03によって切られている。N-Eに方向を取る断面V字形溝である。規模は現状で幅約2.5m、深さ2.1mを測る。壁面の遺存している北側壁面を基に、溝底面で折り返すとの検出面において約3.2mの溝幅が復元される。溝の両壁面はほぼ同じ傾斜であり、その角度は約50°を測る。壁面は平滑であり、下部は八女

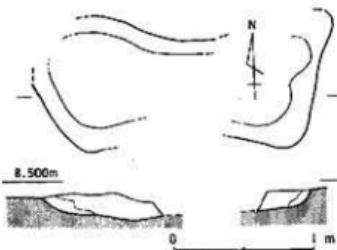


図26、土壙SK04実測図 (1/40)

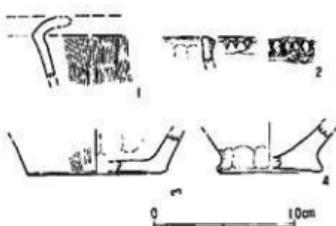


図25、SB03出土遺物 (1/4)

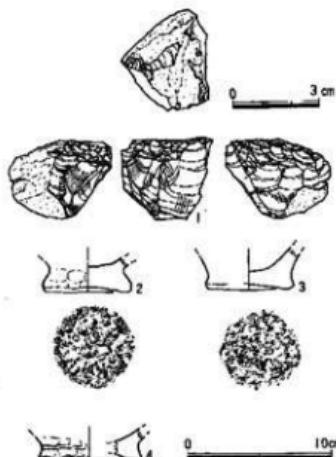


図27、その他の出土遺物 (1/2、1/4)

粘土層を掘り込んでいる。溝の底面は狭く、一人人が立ち方向を変えるのが困難なほどである。なお、調査区西側では溝の下部を50cmほど掘り残した陸橋状の施設を設けている。溝内の埋土は上部から中位に黒褐色土(1~4層)が、下部に灰~茶褐色土(5~9層)が堆積している。遺物は少なく上部からはほとんど出土せず、中部から下部にかけて少量の土器片が出土した。

図32—2~4, 6はSD01出土遺物である。2は壺の口縁部である。頸部は内傾し口縁部で外反する。3, 4は刻目突帯文土器片である。3は胴部で屈曲するものであり、屈曲部に刻目突帯文がある。4は底部である。底径約8cmに復元される。6は土器片を二次加工した円盤である。周囲を荒い敲打で整えている。これらは夜白式土器である。

2. 溝SD02: 調査北端のA8で検出した。SD01とはほぼ並行し、約6m離れている。規模は幅1.4~1.5m、深さ0.8mを測る。断面は逆台形であり、壁面は60~70°の傾斜である。床面幅は0.7~0.8mを測る。溝内埋土は上、下に二分される。上層は暗褐色土であり、北側にややローム土塊を多く認めた。下層はローム土塊を多く含む茶褐色粘質土である。何れも自然流入土であるとみられた。溝内下層中床面より10~20cm上位に土器類の遺物が出土した。

図32—1, 5はSD02出土遺物である。1は壺である。口縁部を欠く。肩が張り、平底をもつ。5は壺の底部である。底径7.2cmを測る。

3. 溝SD03: SD01を切り、やや南側に重複する溝である。溝はSD01とはほぼ並行するが、調査区北側で東へ折れ始めている。溝の規模は幅約4.2m、深さ約1.4mを測る。溝断面は浅いU字形であるが、標高約8.5m付近の両壁に段があり、二段掘り状をなす。溝内埋土は大きく3層群に区分される。上層は茶~黒褐色土(1~5層)、中層はローム土塊混じり褐色土(6~16層)、下層は暗褐色粘質土(17層)である。下層は水性堆積物であり、中層は人

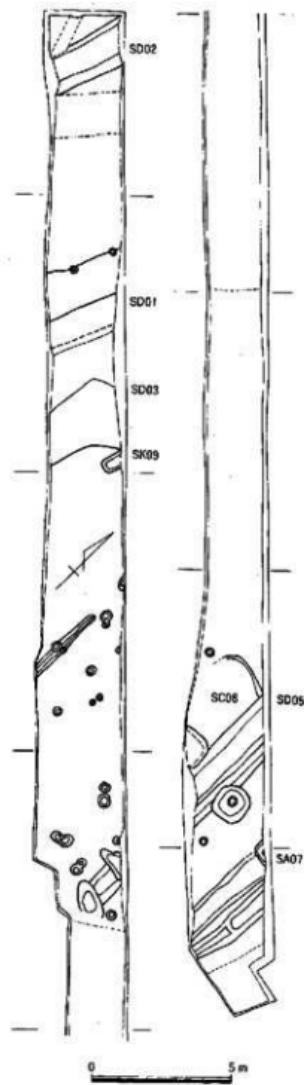


図28. B調査区平面図 (1/200)

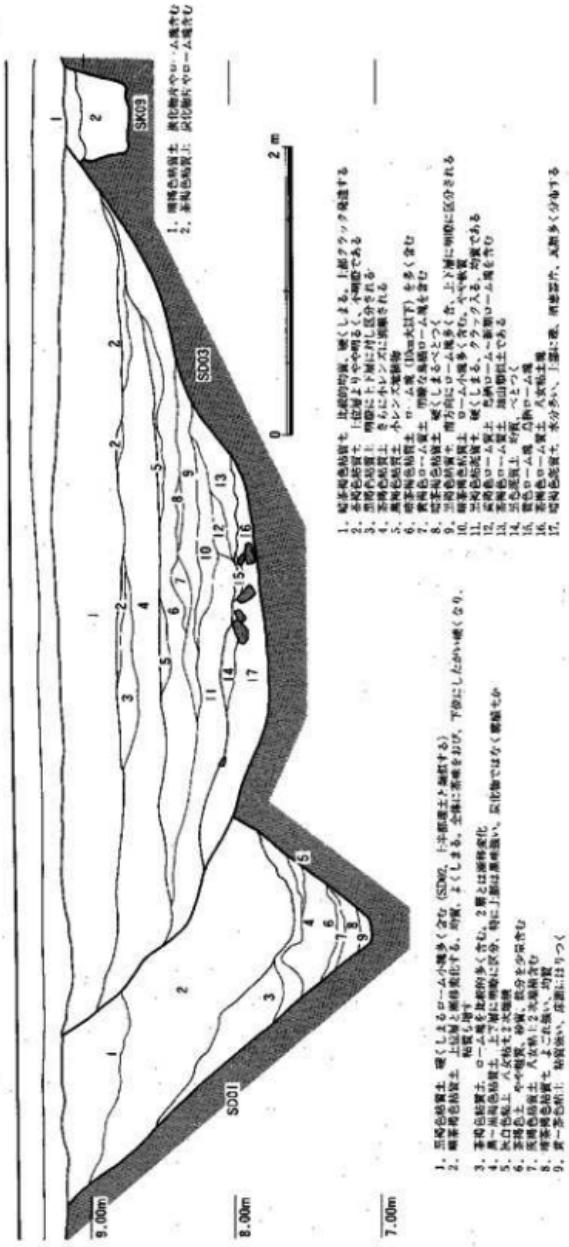


図29、津SD01、SD03+脣断面図(1/40)

為的埋め土、上層は長期間の自然流入、形成土とみられた。遺物は全体に多く出土したが、下層で円礫、角礫、上器片、瓦片などが數き詰めたように出土した。

図30～32はSD03出土の代表的遺物である。1～20、33、34はおもに上、中層から出土した。1～8は弥生式土器である。1は複合口縁壺である。口縁は「く」字形であり、頸部に突帯を巡らす。2～4は甕である。2、3は口縁部、4は底部である。5、6は甕か壺の底部である。7、8は器台である。9は土師器の牛角把手付甕である。10～15は須恵器である。11は杯蓋、12、15は杯身、13は壺、14は甕の口縁部である。16～20は埴輪である。18は朝顔形埴輪の頸部、他は円筒埴輪の破片とみられる。外面は縱ハケ・時調整のみで、断面凸形の突帯を巡らせている。埴輪片は他に10点余り出土した。33は石核である。黒鉄石角礫を素材とし、打面未調整である。34は剥片である。平坦打面で風化が進んでいる。

21～32はおもに下層から出土した。古瓦、白磁、黄釉陶器、石錠などがあるが、いずれも破片である。白磁は17片あるが、青磁は底部1片のみである。25タイプの玉縁白磁碗が大半を占め、23の高台内側を斜めに削り取るものと、24の端ぞり口縁で高い高台をもつ形態の碗が少数组み合わさっている。21は灰色の釉薬がかけられた小壺の栓で、露胎の下半部は粗く斜めに糸

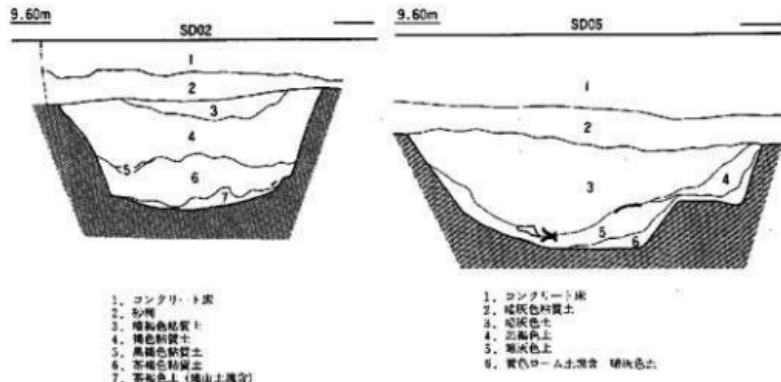


図30、溝SD02、SD05土層断面図 (1/40)

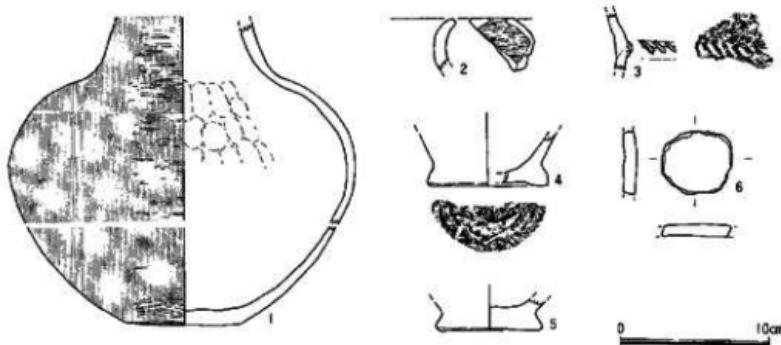


図31、SD01、SD02出土遺物 (1/4)

切りにより切断されている。22は白磁小皿で灰白色の透明の釉下に牡丹文が明顯に刻まれている。底部は軸薺が削り取られ灰褐色を呈し、径2.5cmの焦げ跡がついている。26は滑石製石鍋の破片で、図左側にわずかながら二次加工の痕跡が認められる。27は両面ともほん平坦で黒色の煤が固着し光沢をおび、一面に刀のキズ様の刻線が不規則につけられ、隅に小穴をうがち、石質は白色である。いわゆる温石としての使用であろう。石鍋は他に7片出土している。28-32は瓦片である。格子と縄目の叩打痕の平瓦がおおい。瓦は他に12片ほど出土している。これらの下層の遺物には11世紀中葉から12世紀中葉の年代が与えられる。

4. 溝SD05：調査区南側のA2区で検出した。主軸をN-10°-Wにとり、柱列SA07に切られる。規模は幅約1.7m、深さ約0.8mを測る。断面逆台形であり、東側のみ二段掘りとなる。埋土は全体に変化に乏しい暗褐色上であり、中-下部に多くの遺物が出土した。

図34はSD05出土遺物である。1~16、19は須恵器であり、17、18、20、21は上師器である。1~8は杯蓋、9~12は杯身、13、14は長脚二段透かしの高杯、18は高杯杯部、16は提瓶、15、17は壺、19~21は甌である。これらは古墳時代後期、6世紀後半に位置づけられる。

5. 柱列SA07：調査区南側のA1、2区で検出した。主軸をN-88°-Eにとる3つの柱穴からなる。掘り方は平面が隅丸方形をなし、一辺

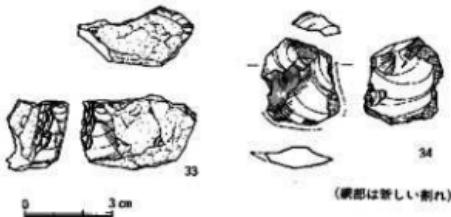


図32、SD01周辺出土石器 (1/2)

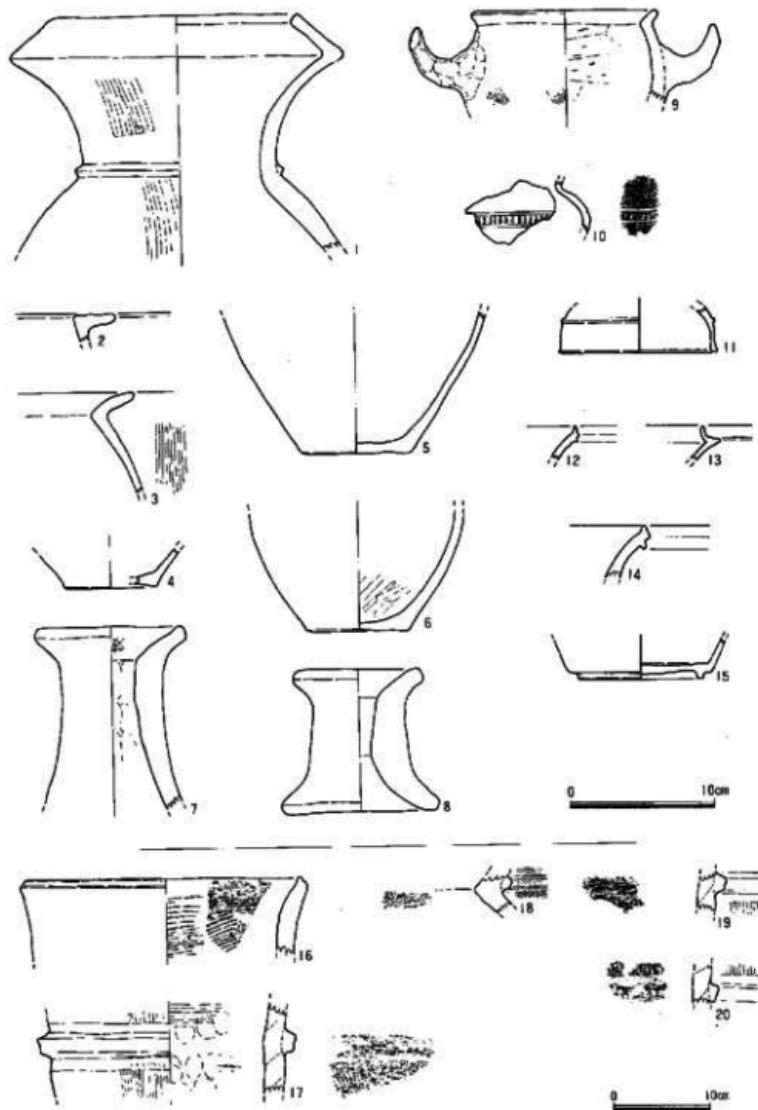


图33、SD03出土遗物(1) (1/4, 1/6)

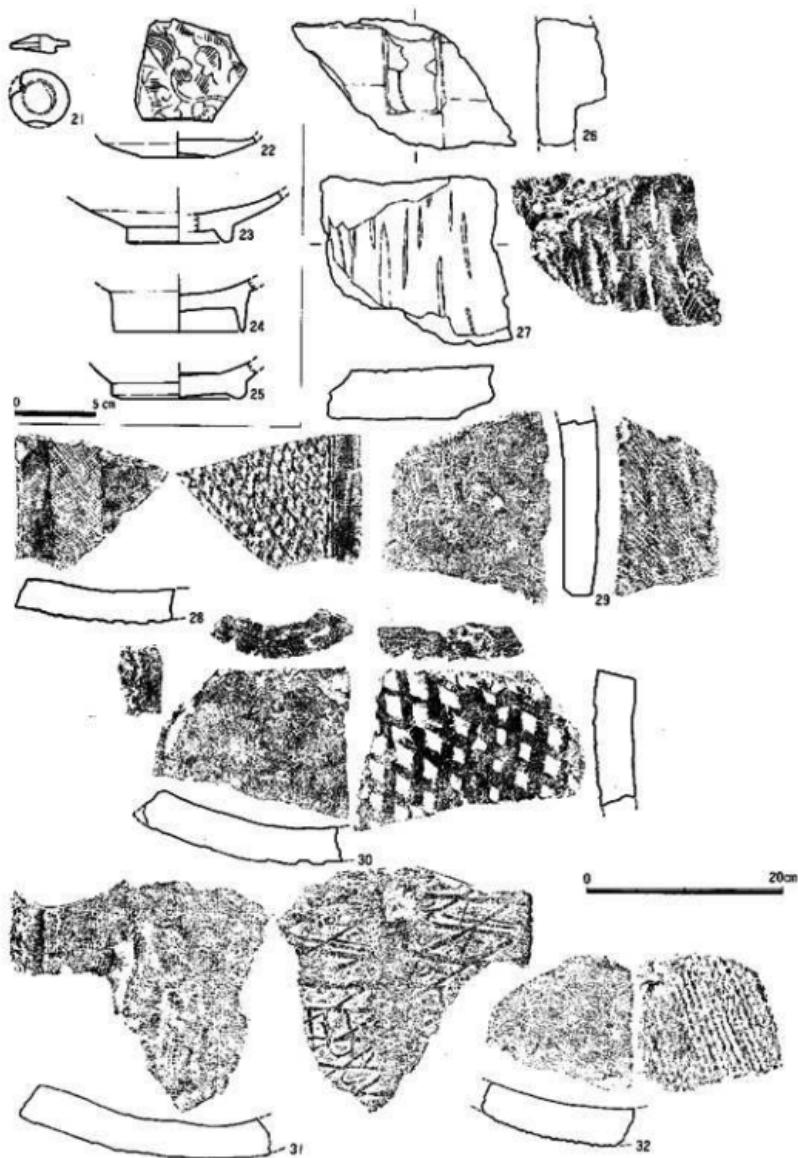


图34、SD03出土遗物(2) (1/4, 1/6)

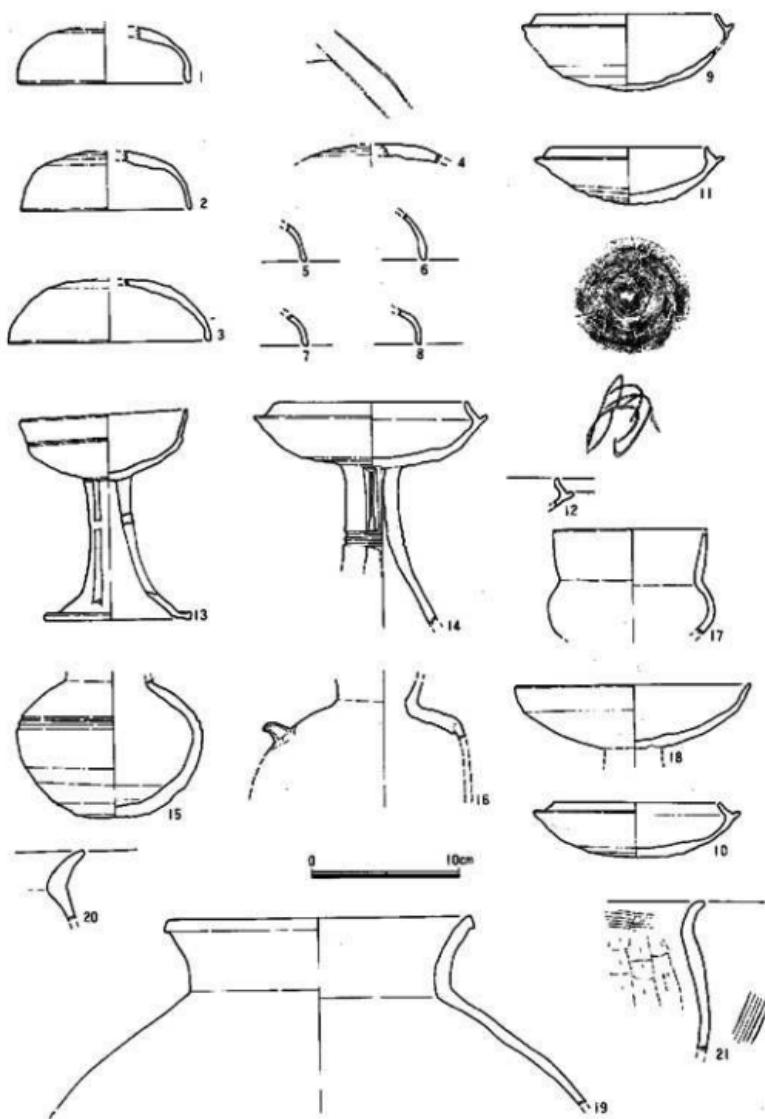


圖35、SD05出土遺物 (1/4)

約1.2mを測る。埋上中と床面に柱痕跡が残り、直径30cm前後の柱と推定される。柱間距離は真芯で230cmを測る。調査区内で他に対応する柱穴が見あたらず、建物を構成するかは不明である。柱穴内からは少量の土器片が出土したが時期を決めるものはない。SD05を切ることから7世紀前半以降のものとみられる。

6. その他の遺構：B調査区では以上の遺構の他に堅穴住居跡1棟(SC08)、溝4条、土壙3基、柱穴19などが検出されている。しかし、何れも部分調査であり遺存状態が悪く、出土遺物も少ない。堅穴住居SC08は調査区南側にあり、遺存状態は悪い。方形プランの限部のみ深さ10cm以下が残る。1~3は住居内埋土から出土した。1は須恵器壺蓋、2は同壺身、3は甕口縁部である。6世紀末葉か。土壙SK09は溝SD03に切られる。規模は幅約60cm、長さ90cm以上である。4は須恵器壺蓋である。7世紀後半か。その他については西側隣接地の連続部分の調査をまって、あわせて報告したい。

#### IV. C (確認) 調査区

##### 1) 調査概略

調査対象地は倉庫跡地内の幅約4~6m、長さ約42mである。倉庫床面の舗装部分をカッターで切断し、その後重機で客土まで取り除いた。その後人力で遺構の検出作業をおこなった。検出した遺構は溝2条、土壙4(井戸を含む)、柱穴1であった。これらの遺構については遺構の遺存状態を調べるために一部に試掘溝を設け調査した。その後、砂、土を入れ、埋め戻した。

##### 2) 検出遺構と遺物

###### 1. 溝SD21：遺構は調査区南側で検出した。ほ

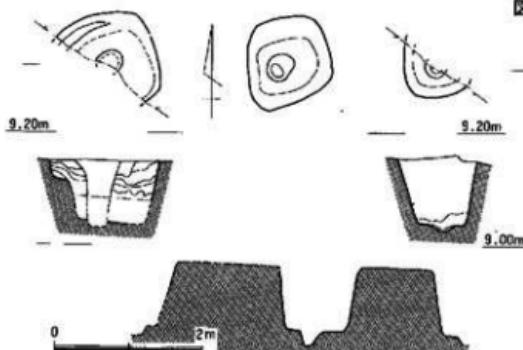


図37、柱列SA07実測図 (1/80)

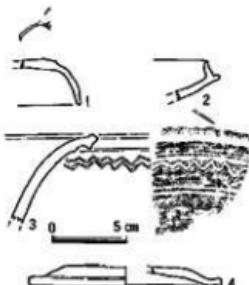


図36、堅穴住居SC08、  
土壙SK09出土遺物 (1/4)

は南北に向くが、東側を中心とする弧を描いている。幅は1.0~1.4mを測る。溝の断面は逆台形を呈し、深さ約0.4mである。溝内埋土はおもに地山の二次堆積物からなる。埋土中から少量の須恵器片、土師器片などが出土した。図39-5は須恵器杯身である。8世紀前半に位置付けられる。

2. その他の遺構：調査区の中央付近に柱穴SP23、井戸SE24がある。何れも検出時に弥生時代の土器片が出土した。図39-1~4はSP23から出土した。1、2は甕、3は高杯、4は鉢である。1がやや特異な形状をなすが、弥生時代中期後半に位置づけられよう。調査区北側では溝1条（SD22）と土壙3基（SK25~27）を検出した。SD22は幅1.1mでN-82°-Eに向き、SK25、26を切る。SK25、26は方形、SK27は円形の平面形である。SK25、26は柱穴か土壙、SK27は井戸の可能性が高い。何れも時期は不明であるが、SK25~27は弥生時代中期以降、SD22は古墳時代以降と推定される。

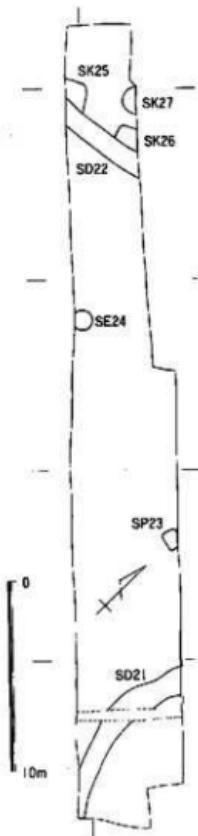


図38、C調査区平面図 (1/300)

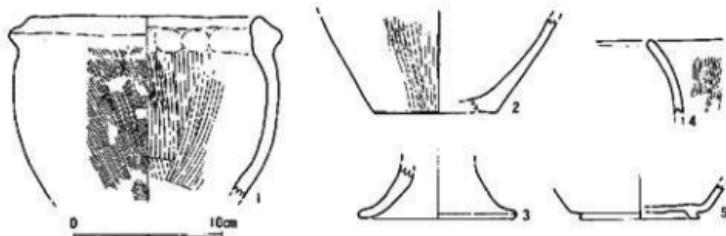


図39、SD21、柱穴SP23出土遺物 (1/4)

## 第6章 まとめ

今回の那珂遺跡群第37次調査では、縄文時代から古代末に及ぶ各時期の遺構、遺物を検出した。事前には福岡市文化財地図における那珂遺跡群の推定域の周辺にあたり、遺跡の分布が知られていない地域であった。二次の試掘調査により遺構の存在は明かとなつたが、周辺には道路、鉄道、工場が建ち並び、遺構の保存状態が極めて悪いことが予測された。こうした点から調査成果の期待は薄かった。ところが、調査によって各種、各時期の遺構の遺存があり、中でも2本の溝状遺構は、同時期に掘削された環濠の一部である可能性があり、出土した土器類からみて板付遺跡の環濠を遡る時期のものと推定された。この遺構や周辺の遺跡の調査は弥生時代社会の始源研究のうえで極めて重要な意味を持つと考えられたのである。

以下では今回の調査成果について各時期ごとの概要を示し、報告のまとめとしたい。

### 1) 古墳時代以降

この時期を区分するとa) 古墳時代後期、b) 古代前期、c) 古代後期となる。a)期の遺構はB調査区の溝SD05、柱列SA07がある。また混入遺物としてA調査区のSD01から須恵器類、B調査区のSD03から土師器片、埴輪片が出土した。この時期はさらに5世紀末から6世紀前葉と6世紀後半に三分され、埴輪片は後者の時期に比定される。なお埴輪をもつ同時期の古墳としては北約1kmに東光寺剣塚古墳<sup>①</sup>がある。しかし、埴輪の形状、器面装飾に若干の差がある。本遺跡が埴輪生産地でなければ、周辺に別の古墳が存在するとみられる。b)期はC調査区のSD21がある。c)期はB調査区のSD03がある。これは規模の大きい濠の一部とみられ、内部から出土した陶磁器類、石鍋、瓦などからみて、平安後期の居館を囲む施設と考えられる。

以上、この時期の検出遺構は少ないが、各時期に集落や墳墓があったとみられる。また、埴輪や大型の柱列（建物）が存在し、付近に古墳や特殊な施設があった可能性もある。

### 2) 弥生時代中期～後期

この時期はさらに中期初頭、中期後葉～末葉、後期中葉に三分される。前者の遺物は極めて少ない。中者の遺構や遺物はA～C調査区で検出されている。遺構はA調査区の建物SB03、土壤SK04、柱穴、SD01の上層、C調査区の柱穴SP23、土壤（井戸）SK24～27などがある。また混入遺物としてはB調査区SD03の上、中層がある。A調査区SD01上層出土の遺物はその層位的位置から古い環濠の窪地をこの時期に二次的に掘削し、投棄されたものと考えたい。建物SB03は規模が大きく、周辺では那珂遺跡23次調査で同様のものが検出されている<sup>②</sup>。後者の時期の遺構はなく、遺物が各所から出土しているだけである。なお比恵、那珂遺跡ではこれらの時期に集落の発展がみられる。中期の大型建物の存在から本地点もこうした集落の中心の一つとみられるが、他の地点と異なり、後期に入ると規模が縮小したと考えられる。この点については今

後の調査の課題である。

### 3) 縄文時代晩期～弥生時代前期

この時期の遺構はA調査区のSD01、SD02と、B調査区のSD01、SD02がある。今次調査では他に同時期の遺構を検出することが出来なかった。以下では検出した遺構と遺物について検討する。

#### 1. 二重環濠遺構について

A調査区で検出したSD01は断面がV字形をなし、検出時の幅4～5m、深さ1.6～2.1mである。SD02は断面が逆台形をなし、幅1.4～2.0m、深さ0.6～0.8mである。二条の溝はA調査区で5m、B調査区で6m離れて並行している。溝内には共通して暗色土を主とする均質な埋土が堆積していた。ただし、A調査区のSD01の上部からは時期の下がる遺物が多く出土した。

A調査区のSD01、SD02の検出平面の円弧から径を算出すると、SD02の内側の半径が65m前後となる。中心点は現在のJR鉄道路線内にある。これで正円を描くとB調査区でのSD02の北側検出線からは1～2m外側の位置となる。つまり、正円に対して数%の誤差となる。しかし、同じ

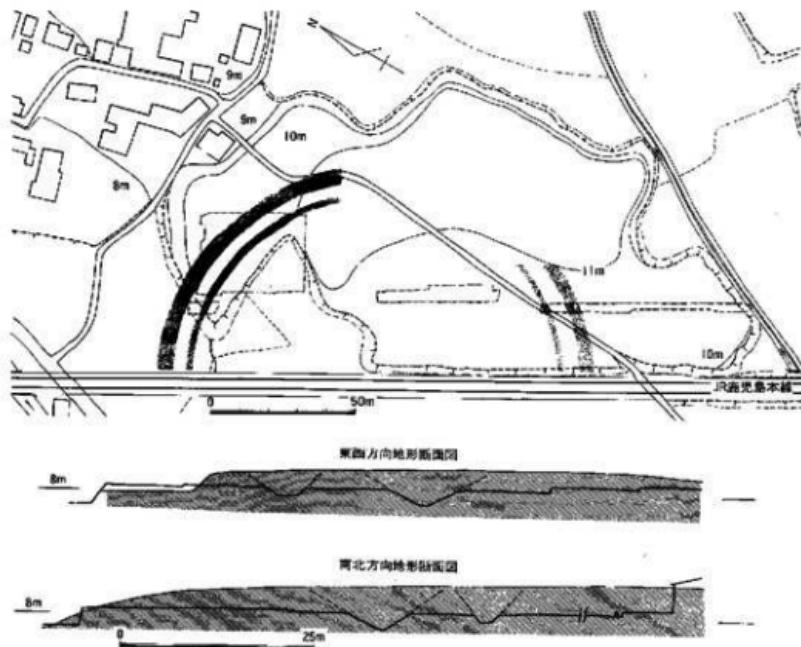


図40、環濠立地復元図 (1/2000, 1/750)

中心点を用いてSD01をみると、A調査区に対しB調査区の両溝の間隔が1mほど広い分、誤差はより少なくなる。

以上の点からみると、この両調査区の溝は一連の環濠の一部であると判断されよう。また、この範囲内では多少の誤差はあるものの正円に近い円弧を描いているとみられる。二本の溝が偶然にあるいは前後して重複・掘削されたとは考え難い。

規模はこの溝が仮に完周し、かつ正円に近いものであるとするならSD02の内径が約125m、SD01の外径が約150mほどに復元される。以下では、A、B両調査区のSD01、SD02をそれぞれ同じ造形と判断し、内側を巡るSD02を「内濠」、外側を巡るSD01を「外濠」と呼びたい。

なお、今回確認したこの環濠造構は検出面が鳥柄ローム下部であり、相当の削平を受けているとみられた。1910~20年代（明治末年~昭和初期）の地形図で、本調査区付近の削平以前の地形をみると現在より2m程高い地形であったことがわかる。付近は早くから開墾され畠地となっていることから、開墾後削平以前の土壤上部の流出も考慮すべきであるが、地形、標高の判明するより古い地形図がないことから、開墾以降の地形変化は無視し、1920年代の地形図に今回の調査区を重ね合わせてみた（図40）。丘陵地は東側に高く、西側に低くなっている。これは環濠床面の傾斜と一致し、溝の深さは地形に沿っていたとみられる。また十層断面で復元してみると（図41）、現在残されている環濠はほんの下半部に過ぎないことがわかる。削平以前の地表を仮に上場とすると、平均的にみて外濠が幅約6~7m、深さ約4mに、内濠が幅約3.5m、深さ約2.3~2.5mに復元される。このために外濠と内濠の間隙は3m以下になると推定できる。

## 2. 出土遺物について

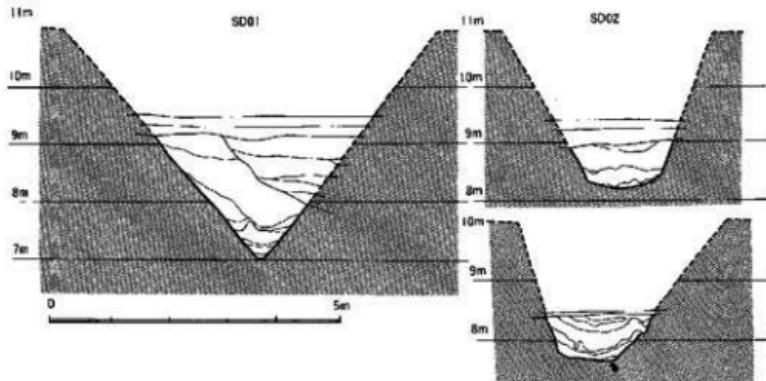


図41、環濠断面復元図（1/100）

a. 遺物の出土状態：環濠内からは土器類、石器類、土製品などが出土した。出土状態には特徴があり、遺物は内濠に多く出土し、外濠には極めて少ない。また、内濠では床面からわずかに浮いた位置に遺物が集中出土し、それより上部では少ない。これは遺物がおもに内濠内から投棄され、外濠外からの流入が少なかったためと考えられる。また、内濠への遺物の投棄は埋没を始める最初の段階に限られ、その後はほとんどなかったとみられる。

b. 環濠出土土器の縦年の位置づけ：内濠からは比較的まとまった土器類が出土した。外濠からも少量の土器が出土したが、A調査区内において新しい時期のものと混ってしまった可能性が高い。ここではそれらを含めて検討し、最終的に環濠の時期の土器様式を観定したい。

環濠出土の土器類の器種は以下のように甕5形式、深鉢2形式、浅鉢1形式、高杯1形式、壺3形式に区分される。(図42)。

甕1類 砲弾形の器形で、口縁部外面に刻目突帯を1条もつもの。

甕2類 脊部上半で屈曲内傾し、屈曲部と口縁部の外面に刻目突帯を1～2条もつもの。

甕3類 砲弾形の器形であり、突帯を持たないもの。口唇部外端に直接刻目を施すものがある。口縁が僅かに外反するものを含む。

甕4類 甕3類に類似するが、口縁が如意形に強く外反し、口唇部全体に刻目を施すもの。板付式の甕の典型である。

甕5類 口縁が如意形に外反し、口縁から胴部上位を肥厚させ段をつけるもの。

深鉢1類 脊部上半が「く」字形に内傾するもの。

深鉢2類 口縁は直線的に立ち上がり、胴部上位に突帯を巡らせるもの。

壺1類 球形から卵形の胴部に内傾気味の頸部がつき、口縁部が短く強く外反する

壺2類 口縁部を肥厚させ、頸部との境に段をつける。肩部にも段や沈線をつける。板付式の壺の典型である。

壺3類 脊部から口縁まで緩やかにカーブを描き外反する。肩部にヘラ書きの沈線や装飾を施す例が多い。口縁部内面を肥厚させるものや、口唇部に刻目を入れるものもある。

浅鉢 脊部上半が強く屈曲内傾し、口縁はまた外反するもの。同じ器形で高杯となるものがある。

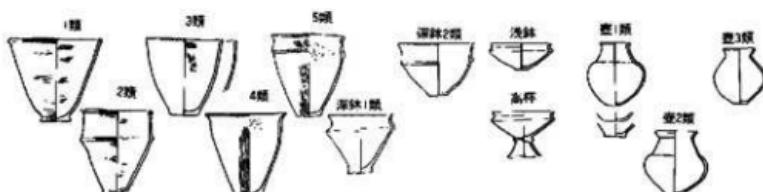


図42、土器形式分類概念図

高杯 浅鉢形土器と同形態の杯部に低い脚部のついたもの。

これらの土器類の消長と型式的変化を基本とし、福岡平野における甕1、2類の存続期間を次の6式に様式区分し、編年した。なお、この編年試案の詳細は別稿を用意した<sup>23</sup>のでそれを参考とされたい。

1式 板付遺跡G7a、b区下層<sup>24</sup>、同遺跡E5・6区9層<sup>25</sup>出土土器を基準資料とする。上

器組成は甕1、2、3類、深鉢1類、壺1類、浅鉢、高杯などである。甕1、2類の口縁部突帯は口唇部よりやや下に付けられるものが多く、刻目は深い。甕2類は胴部上位の屈曲が強い。深鉢、浅鉢は胴部上位の屈曲が強い。浅鉢には口縁四方が高いもの、口唇部に装飾の付くものがある。壺は丸底や棱線の不明な平底である。

2式 板付遺跡E5・6区8層、野多目遺跡SD02下層<sup>26</sup>出土土器を基準とする。土器組成は1式と基本的に変化ない。甕1、2類の口縁部突帯は口唇部より下に付けられるものが半数程度となり、刻目はやや浅くなる。甕2類や深鉢、浅鉢は胴部上位の屈曲がやや弱まる。浅鉢には口縁四方が高くなるもの、口唇部に装飾の付くものが少なくなり、この段階では失われる。

3式 板付遺跡E5・6区7層、野多目遺跡SD02上層、SD01出土土器を基準とする。上器組成は甕1、2、3、4、5類、浅鉢1類、深鉢1、2類、壺1類、高杯などからなる。甕1、2類の口縁部突帯は口唇部より下に付けられるものが半数以下となり、突帯は細く、刻目は浅くなる。甕2類や深鉢、浅鉢は胴部上位の屈曲がやや弱くなる。甕3類は少なくなり、甕4類が現れる。なお甕類の中で4類は極く少量である。浅鉢、深鉢は屈曲がいっそう緩やかとなる。壺1類はほとんど平底となる。

4式 板付遺跡G7a、b区上層、同遺跡G6a区<sup>27</sup>粗砂層出土土器を基準とする。土器組成は甕1、2、3、4、5類、浅鉢1類、深鉢1、2類、壺1、2類、高杯などからなる。甕1、2類の口縁部突帯は口唇部に密着するものが主体となり、口唇部より下に付けられるものが3割以下となる。甕2類や深鉢、浅鉢は胴部上位の屈曲が弱くほど直立上がるものが多くなる。甕4類は胴部の膨らみがなく、器面調整は丁寧である。量はやや増える。壺2類が現れる。これは口縁と肩部の外面に段が付くものである。壺類では2類はわずかであり、1類が圧倒的に多い。

5式 板付遺跡市営住宅1区D-17トレンチ19層<sup>28</sup>、那珂遺跡第10次第1文化層出土土器を基準とする。土器組成は甕1、2、3、4、5類、浅鉢1類、深鉢2類、壺1、2類、高杯などからなる。甕2類は胴部上位の屈曲部から上部でやや外反気味に広がるものが多くなる。甕4

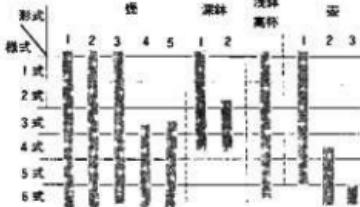


図43. 上器形式の消長図

類は量が増え、壺1、2類とほぼ同数となる。壺5類は肩部上位の段に刻目を施す。浅鉢は肩部上半の屈曲から口縁部が大きく外反する。壺1類は口縁の外反が強まり、小型の器形が多くなり、この段階で失われる。壺2類は量が増す。

6式 板付造跡市営住宅1区SK24、那珂遺跡第21次SK45、SK47<sup>12</sup>出土土器を基準とする。土器組成は壺1、2、3、4、5類、浅鉢1類、深鉢2類、壺2、3類、高杯などからなる。壺1、2類の口縁部突帯はほぼ全て口唇部に密着する。これらの突帯は小さく、刻目も不明瞭である。壺4、5類は量が増え、壺1、2類は逆に少なくなる。突帯文系の壺、1、2、3類はこの段階に失われる。壺4、5類の口縁部刻目を口唇部下端に小さく施すものが現れる。浅鉢は小型の器形が多くなる。壺1類は失われ、かわって壺3類が現れる。壺2類は肩部の段が不明瞭となり、かわって沈線を施すものもみられるようになる。

以上の編年案においては様式ごとの全ての土器型式を網羅しているものではなく、代表的且つ特徴的变化を中心に小様式の設定、編年を行っている。この1から6式は森貞次郎氏による夜臼式から板付I式、板付II式<sup>13</sup>の一部にあたるものである。ここでは1~3式を夜臼式、4、5式を板付I式、6式を板付II式に対応させておく。また、最近の山崎純男<sup>14</sup>、田崎博之氏<sup>15</sup>による該期の細分編年案と対応させると、表1のようになる。

さて、内塗の出土上器は壺1、2、3、5類、深鉢1、2類、浅鉢、高杯、壺1類がある。このうち壺は1、2類を主体とし、3、5類は少量である。また4類は見あたらぬ。外塗はA調査区で壺1、2、3、4類、壺1、2、3類があり、B調査区で壺2類、壺1類が出土している。A調査区の壺にはやや古い特徴をもつ壺3類(93)や、壺1類(105)がある反面、6式の特徴をもつ壺1類(104)や壺4類(94)、壺3類(108)が含まれている。

このように内塗の土器類は壺4類を含まないが、3式のはば単純組成とみてよい。外塗の上器はB調査区の土器からみて内塗と同じ時期であり、A調査区においては本來3式と6式が層位的にあったものを調査時に混在してしまったものと考えられる。以上の点からこの二重の環濠は何れも3式の段階に埋没を始めたものと考えられる。6式段階の遺物は外塗の埋没過程に流入したものと考えられる。6式段階の遺物はB、C調査区側で出土しないことから、A調査区付近もしくはその北側に該期の何らかの遺跡が存在すると考えられよう。

c. 共伴石器について：今次調査では量は少ないものの石器類が出土した(表2)。石器類は剥片石器類24点、礫石器11点がある。この中でA調査区外塗や環濠以外の出土品には新旧の遺物が混入している。つまり、A調査区外塗出土の砥石は面取りがあり、その多くが上部で出土した

森貞次郎 (1961)	山崎純男 (1980)	田崎博之 (1992)	当研究案 (1994) ※年付記入
夜臼 I	夜臼 I		1式
夜臼 II			2式
			3式
	板付 IIIb		4式
板付 I	板付 I	①式	板付 I式
板付 II式	板付 II式	②式	6式
			板付 II式

表1. 刻口突帯文土器編年表

弥生時代中期後葉以降の時期に所属すると考えられる。しかし同遺構の剥片石器類や偏平打製石斧などは同時期には使用されないことから、環濠埋没時期の3式か6式に伴うものとみられる。また、B調査区の剥片（図32-34）は特徴から先土器時代に所属するとみられる。こうした点からみて環濠に伴うとみられる石器は剥片石器類23点と砾石器類7点である。

剥片石器の石材はA調査区内濠の剥片1点が古銅輝石安山岩である以外はすべて黒曜石である。石器組成の内訳は石核1点、使用痕有る剥片1点、剥片・碎片17点、石核4点である。出土量が少なく多くを語ることはできないが、石材が黒曜石を主体とし、剥片・石核に対して石器が少ないとすることはこの時期の一般的特徴である<sup>11)</sup>。また石核は剥離調整技術から2種類に分かれる。それは角砾素材で自然面打面をもち、打面調整や転移をおこなわないもの3点（図17-132、27-1、32-33）と、角砾素材で平坦打面をもち、打面調整や転移をおこなわないもの1点（図23-107）である。前者は該期の主体的剥離技術である「十郎川型剥片剥離技術<sup>12)</sup>」に類似するものの打面を転移しない点で異なる。また、後者はこの時期の剥片素材石核で、楔型石器に類似した形態をとるものとも異なる。出土した4点の石核は何れも剥片剥離の初期段階で作業を中止しているものである。このことから、先の剥離技術の範囲内で考えて良いのか、新たな剥離技術とみて良いかは断定はできない。今後の類例を待ちたい。

砾石器は柱状石斧2点、偏平打製石斧3点、磨石2点がある。柱状石斧は破片であり、全体の形態などは不明であるが、いわゆる大陸系磨製石斧である。偏平打製石斧は欠損品であるが、復元すると長さ10cm前後のバチ形となる。これは偏平打製石斧A類<sup>13)</sup>にあたり、この形態に限られることは該期の石製農具の特徴である。

#### 註

1. 古留秀敏編1991「東光寺跡跡古墳」福岡市教育委員会
2. 下村智、荒牧宏行編1992「都城道路4」福岡市教育委員会
3. 古留秀敏1994「板付武士墓成立期の土器編年」『古文化談叢』32集、九州古文化研究会
4. 山崎純男1980「弥生文化成立期における土器の断年的研究」『鏡山氏先生古希祈念古文化論叢』
5. 山川謙治1980「板付」福岡市教育委員会
6. 山崎純男編1987「野多目遺跡群」福岡市教育委員会
7. 沢屋正伸1977「板付周辺遺跡調査報告書4」福岡市教育委員会
8. 沢屋正伸1976「板付」福岡市教育委員会
9. 山川謙治編1992「都城5」福岡市教育委員会
10. 齋藤貞郎、岡崎敬1961「福岡県板付遺跡」「H木農耕文化の生成」
11. 註3と同じ
12. 田嶋博之1992「弥生時代初頭の土器」『那珂5』福岡市教育委員会
13. 古留秀敏1993「縄文後期から晩期の石器総合の変化とその評価」『古文化談叢』30集（上）九州古文化研究会
14. 岩見信1984「縄文時代晩期の石器」『史学論叢』15号
15. 註13と同じ

	調査区	剥片石器			磨石器			合計
		石核	剥片	碎片	磨石	打製石斧	磨石	
A調査区 SU01		-	4	1	-	2	4	11
* SU02	1	-	6(1)	1	2	1	2	13
その他	-	-	3	1	-	-	-	6
B調査区 SU01	-	-	2	1	-	-	-	3
* SU02	1	1	-	-	-	-	-	2
その他	1	1	-	-	-	-	-	2
合計	1	1	18	4	2	3	6	35

表2. 37次調査出土石器一覧

表 3. 遺物観察表 1

Fig.番号	品種名	名	出土場所・地質	品目	寸法(cm)	概要(cm)	高さ(cm)	蓋の有無	蓋の有無	遺物記号
Fig.000-001	137	骨器	S001	骨器	-	-	-	-	-	00002
Fig.000-002	146	鉢	S001-1R	鉢	-	-	-	-	-	00002
Fig.000-003	132	鉢	S001-1R	鉢	-	-	-	-	-	00009
Fig.000-004	143	鉢	S001-1R	鉢	-	-	-	-	-	00005
Fig.000-005	132	鉢	S001-1R	鉢	-	-	-	-	-	00026
Fig.000-006	145	鉢	S001	鉢	-	-	-	-	-	00005
Fig.000-007	138	鉢	S001-1R	鉢	-	-	-	-	-	00006
Fig.000-008	138	鉢	S001	鉢	-	-	-	-	-	00006
Fig.000-009	147	鉢	S001-1R	鉢	-	-	-	-	-	00001
Fig.000-010	131	鉢	S001-1R	鉢	-	-	-	-	-	00008
Fig.011-011	060	骨盒	S001-4R	骨盒	6.5-6.7	-	-	-	-	00009
Fig.011-012	061	骨盒	S001-4R	骨盒	-	-	-	-	-	00009
Fig.011-013	062	骨盒	S001-4R	骨盒	-	-	-	-	-	00009
Fig.011-014	074	骨	S001-1R	上部	-	-	-	-	-	00006
Fig.011-015	079	骨	S001-1R	上部	-	-	-	-	-	00006
Fig.011-016	074	骨	S001-1R	上部	-	-	-	-	-	00006
Fig.011-017	072	骨	S001-1R	上部	-	-	-	-	-	00006
Fig.011-018	145	骨	S001	上部	-	-	-	-	-	00006
Fig.011-019	072	骨	S001-1R	上部	-	-	-	-	-	00006
Fig.011-020	073	骨	S001-2-3R	上部	-	-	-	-	-	00006
Fig.011-021	066	骨	S001	-	-	-	-	-	-	00006
Fig.011-022	052	骨	S001-5R	-	-	-	-	-	-	00115
Fig.011-023	057	骨	S001-4R	-	-	-	-	-	-	00003
Fig.011-024	025	骨	S001-4R	-	-	-	-	-	-	00003
Fig.011-025	058	骨	S001-1R	-	-	-	-	-	-	00005
Fig.011-026	080	骨	S001-3R	-	-	-	-	-	-	00005
Fig.011-027	062	骨	S001-3R	-	-	-	-	-	-	00002
Fig.011-028	060	骨	S001-1R	-	-	-	-	-	-	00005
Fig.011-029	064	骨	S001-1R	-	-	-	-	-	-	00005
Fig.011-030	064	骨	S001-1R	-	-	-	-	-	-	00005
Fig.011-031	062	骨	S001-1R	-	-	-	-	-	-	00005
Fig.011-032	063	骨	S001-1R	-	-	-	-	-	-	00005
Fig.011-033	064	骨	S001-1R	-	-	-	-	-	-	00005
Fig.011-034	064	骨	S001-1R	-	-	-	-	-	-	00005
Fig.011-035	077	骨	S001-1R	-	-	-	-	-	-	00005
Fig.011-036	030	骨	S001-4R	-	-	-	-	-	-	00005
Fig.011-037	004	人骨	S001-4R	-	47.8	-	-	-	-	00005
Fig.011-038	080	骨	S001-1R	-	8.5-8.5	3.4-3.5	3.8	-	-	00005
Fig.011-039	020	骨	S001-5R	-	32.5	4.5-4.7	5.9-16.3	-	-	00005
Fig.012-000	060	骨	S001-3R	Ca.-40-Ran	33.1	7.8	12.1	-	-	00005
Fig.012-001	065	骨	S001-4R	-	28.6	8.4-9.3	12.0	-	-	00005
Fig.012-002	060	骨	S001-5R	-	-	-	-	-	-	00005
Fig.012-043	044	金	S001-3R	-	-	6.6-6.7	2	-	-	00004
Fig.012-044	060	金	S001-4R	-	-	6.6-7.1	-	-	-	00005
Fig.012-045	026	金	S001-5R	-	33.8	-	-	-	-	00042
Fig.012-046	053	金	S001-4R	-	35.6	-	-	-	-	00005
Fig.012-047	067	金	S001-3R	-	-	-	-	-	-	00005
Fig.012-048	040	金	S001-4R	-	21.6	-	11.0	-	-	00005
Fig.012-049	054	金	S001-4R	-	-	-	-	-	-	00005
Fig.012-050	026	金	S001-1R	-	38.6	5.9	37.5	-	-	00005
Fig.012-061	026	金	S001-2R	白石	-	-	17.30	-	-	00005
Fig.012-062	032	金	S001-3R	-	19.4	-	-	-	-	00022
Fig.012-063	027	金	S001-3R	-	18.4	-	(36.0)	-	-	00005
Fig.012-064	056	金	S001-3R	白石	12.9	5.1-5.5	8.4-9.8	-	-	00005
Fig.012-065	038	金	S001-3R	-	-	-	-	-	-	00005
Fig.012-066	031	金	S001-3R	-	-	-	-	-	-	00005
Fig.012-067	031	金	S001-3R	-	-	-	-	-	-	00005
Fig.012-068	047	金	S001-4R	-	-	-	-	-	-	00005
Fig.012-069	054	金	S001-4R	-	-	-	-	-	-	00005
Fig.012-070	064	金	S001-4R	-	7.8	5.4-5.7	12.5	-	-	00005
Fig.012-071	061	金	S001-5R	-	7.5	9.5	12.3	-	-	00005
Fig.012-081	045	金	S001-5R	-	-	8.5-9.2	-	-	-	00005
Fig.012-082	025	金	S001-2R	-	2.3	-	-	-	-	00005
Fig.012-083	025	金	S001-1R	-	-	18.6	-	-	-	00005
Fig.012-084	065	金	S001-2R	-	-	8.7-9.5	-	-	-	00005
Fig.012-085	033	金	S001-1R	-	-	-	8.8	-	-	00005
Fig.012-086	045	金	S001-1R	-	-	8.3	-	-	-	00005
Fig.012-087	024	金	S001-1R	-	-	9.2	-	-	-	00005
Fig.012-088	045	金	S001-1R	-	-	7.6	-	-	-	00005
Fig.012-089	032	金	S001-3R	白石	-	9.8-10.4	-	-	-	00005
Fig.012-090	047	金	S001-1R	-	-	-	9.4	-	-	00005
Fig.012-091	053	金	S001-1R	-	-	-	-	-	-	00005
Fig.012-092	064	金	S001-1R	-	7.8	5.4-5.7	-	-	-	00005
Fig.012-093	060	金	S001-5R	-	7.5	9.5	-	-	-	00005
Fig.012-094	031	金	S001-5R	-	7.8-8.6	-	-	-	-	00005
Fig.012-095	027	金	S001-1R	-	-	11.4	-	-	-	00005
Fig.012-096	013	金	S001-1R	-	-	6.7	-	-	-	00005
Fig.012-097	075	金	S001-1R	-	-	7.5	-	-	-	00005
Fig.012-098	013	金	S001-4R	-	-	7.8-8.6	-	-	-	00005
Fig.012-099	064	金	S001-2R	白石	-	12.4	-	-	-	00005
Fig.012-100	075	金	S001-1R	-	-	6.7	-	-	-	00005
Fig.012-101	025	金	S001-1R	-	-	13.3	-	-	-	00005
Fig.012-102	045	金	S001-1R	-	-	-	9.2	-	-	00005
Fig.012-103	025	金	S001-1R	-	-	-	7.9	-	-	00005
Fig.012-104	023	金	S001-1R	-	-	-	7.8-8.6	-	-	00005
Fig.012-105	027	金	S001-1R	-	-	-	-	-	-	00005
Fig.012-106	065	金	S001-3R	-	-	-	6.7	-	-	00005
Fig.012-107	065	金	S001-3R	-	-	-	6.7	-	-	00005
Fig.012-108	066	金	S001-3R	-	-	-	6.7	-	-	00005
Fig.012-109	066	金	S001-3R	-	-	-	6.9	-	-	00005
Fig.012-110	066	金	S001-3R	-	-	-	6.9	-	-	00005







# 図 版



37次調査A調査区全景（西から）

図版 2



1. A調査区全景（南から）



2. A調査区全景（西から）

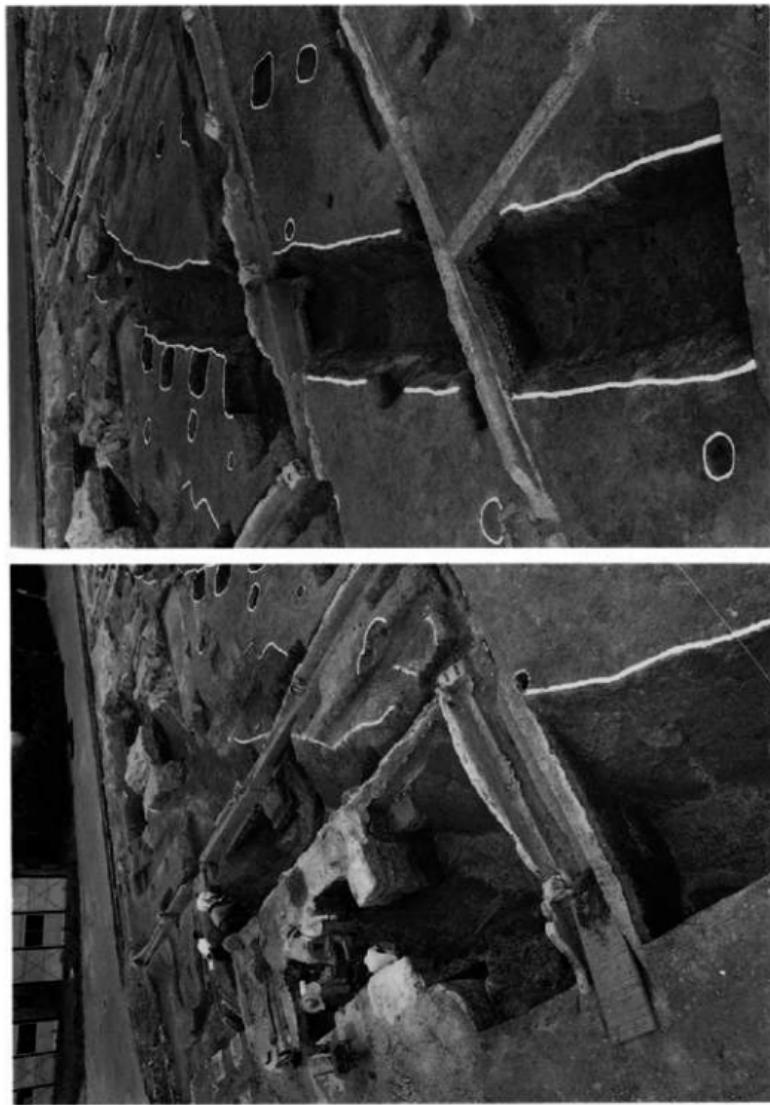


1. A調査区SD01, SD02調査風景（西から）



2. A調査区SD01, SD02完掘状況（西から）

図版 4



1. A調査区(SD01)全景(西から)

2. A調査区(SD02)全景(西から)

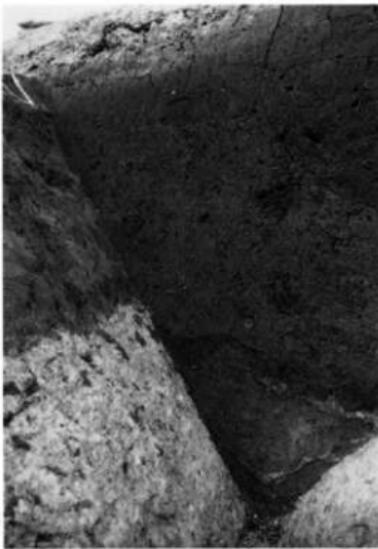


1. A調査区SD01土層断面（西から）



2. A調査区SD02上層断面と遺物出土状況（西から）

図版 6



1. B調査区全景(北から) 2. C調査区全景(南から)  
3. B調査区SD01, SD02  
(北から) 4. B調査区SD01土層断面  
(西から)

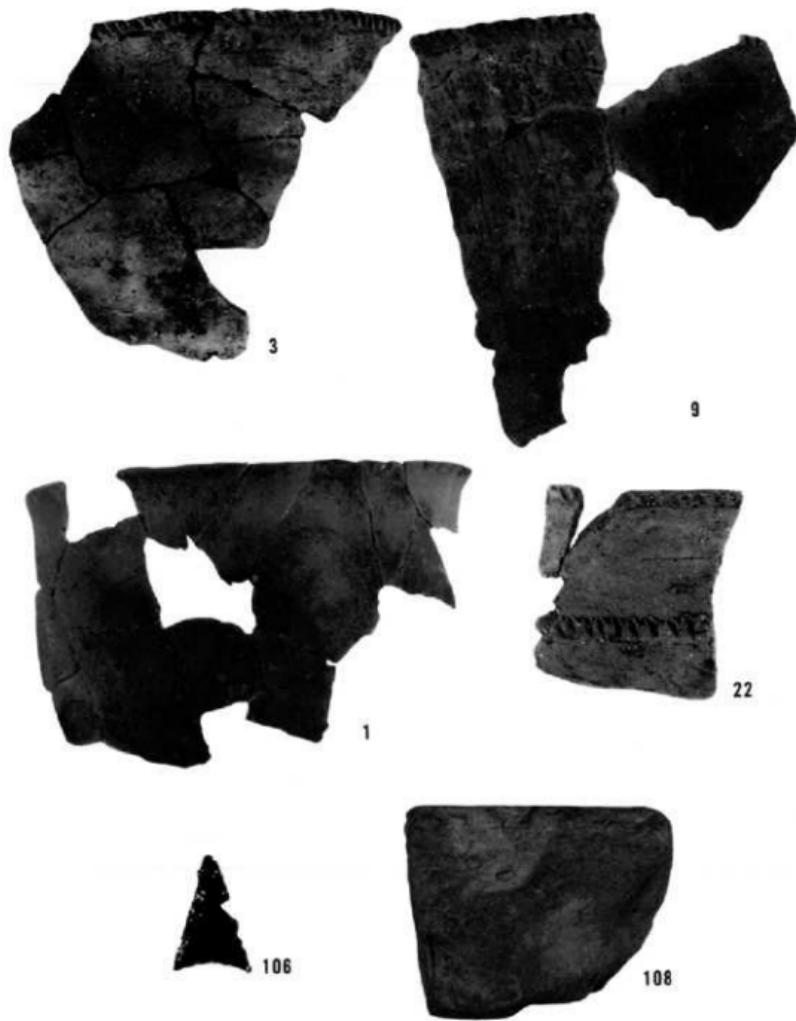


1. B調査区SD01近景（西から）



2. B調査区SD02土層断面と遺物出土状況（西から）

圖版 8



A調査区SD02出土遺物

那 珂 11

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第366集

1994年（平成6年）3月31日

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印 刷 大野印刷株式会社  
福岡市博多区桜田2丁目2番65号

